

荒神山西遺跡

平成元年度国庫補助都市公園事業
町民プール敷地造成事業に伴う発掘調査報告書

1992

長野県辰野町教育委員会



序

荒神山西遺跡は荒神山の西裾に広がる一大遺跡ですが、今までに一度も発掘調査が行われたことがありませんでした。今回初めて荒神山ウォーターパーク建設に先立って調査が実施され、同遺跡の様相を一部ではありますが明らかにすることができました。

その結果、縄文時代の土坑が出土したのをはじめ、弥生時代の住居址3基が出土し、陸耕を予測させる打製石斧の出土もありました。弥生時代はクニが成立し始めた時代であり、その基盤として水稻栽培が始まった時代でもあります。今回の調査で、この水稻栽培と並行して行われていたと考えられる畑作を実証する手掛かりが発見されたのは、大変に大きな成果であったといえます。

本調査は、期間的制約から当初は厳しい調査になると予想されましたが、朝晩霜の立つ厳寒の折にもかかわらず、積極的に調査に参加してくださいました地元の皆様をはじめ、関係者の方々の御協力によって無事に終了することができました。

ここに調査報告書が刊行されるはこびとなり、関係者の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、本書が有意義に活用されることを願う次第です。

辰野町教育委員会

教育長 小林 晃一

例　　言

1. 本書は荒神山再開発に伴う荒神山ウォーターパーク建設に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字樋口2,313-1番地外に所在する荒神山西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は辰野町教育委員会が行った。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成元年12月27日から平成2年2月28日まで現場の作業を行い、平成3年4月1日から平成4年3月25日まで遺物等の整理及び報告書の作成を行った。
4. 発掘調査現場における記録は福島永が担当し、構造等の実測図の作成は大森淑子、上島元彦、田畠幸雄が主として行い、遺物等の実測図の作成は大槻直子、大森、佐藤直子、白鳥栄子、福島が行った。なお、土器復元は福沢幸一氏にお願いした。

発掘調査関係者名簿

1. 荒神山西遺跡発掘調査団

調査団長　友野良一（考古学研究者、宮田村）発掘担当者

調査員　福島永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）

発掘調査協力者　赤羽信雄、板倉たせ子、大森淑子、長田作衛、垣内論、唐沢房夫、
上島元彦、桑沢とよ子、小池みち子、小松祐二、城倉けさみ、茅野安男、
中谷あき子、中谷惺子、中谷雅美、松田あつ子、松田春美、松田まつみ、
村上紀子、村上三扇、百瀬茂久、矢島郁夫、安川義教、山内篤郎、
山崎馨、山崎君男、山崎長雄、山崎誠、山崎良之助

整理作業協力者　宇治ひろゑ、大槻直子、大森淑子、工藤信子、佐藤直子、白鳥栄子、
田畠三千代、村上茂子

2. 辰野町教育委員会事務局

教育長　小林晃一

社会教育課長　小松弘茂（～H. 元）三浦正義（～H. 2）赤羽八洲男（H. 3～）

文化係長　平泉栄一

文化係　田畠幸雄、福島永

目 次

序	
例言	
第1章 調査の契機と経過	1
第2章 位置と環境	
第1節 地形・地質	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 発掘調査	
第1節 調査の方法と調査結果の概要	6
第4章 遺構と遺物	
第1節 住居址	9
第1号住居址／第2号住居址／第3号住居址	
第2節 土坑	19
第1号土坑／第2号土坑／第3号土坑／第4号土坑／第5号土坑	
第3節 その他の遺構と遺物	21
第1号竪穴／第1号ロームマウンド／第2号ロームマウンド／第3号ローム マウンド／第4号ロームマウンド／第5号ロームマウンド／ピット	
第4節 遺構出土の遺物	25
縄文時代中期の土器／縄文時代後期の土器／遺構出土石器	
第5章 まとめ	32
参考文献	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 第3号住居址実測図（2）	15
第2図 周辺遺跡分布図	4	第10図 第3号住居址出土遺物（1）	16
第3図 発掘調査区土層断面図	7	第11図 第3号住居址出土遺物（2）	17
第4図 第1号住居址実測図	10	第12図 土坑実測図	18
第5図 第1号住居址出土遺物	11	第13図 土坑出土遺物	19
第6図 第2号住居址実測図	12	第14図 第5号土坑出土遺物	20
第7図 第2号住居址出土遺物	13	第15図 第1号竪穴実測図	21
第8図 第3号住居址実測図（1）	14	第16図 第1号ピット遺物	22

第17図 ロームマウンド実測図（1）	23	第22図 遺構外出土石器（2）	29
第18図 ロームマウンド実測図（2）	24	第23図 遺構外出土石器（3）	30
第19図 縄文土器拓影図（1）	26	第24図 遺構外出土石器（4）	31
第20図 縄文土器拓影図（2）	27	付 図 荒神山西遺跡遺構平面図	
第21図 遺構外出土石器（1）	28		

写真図版目次

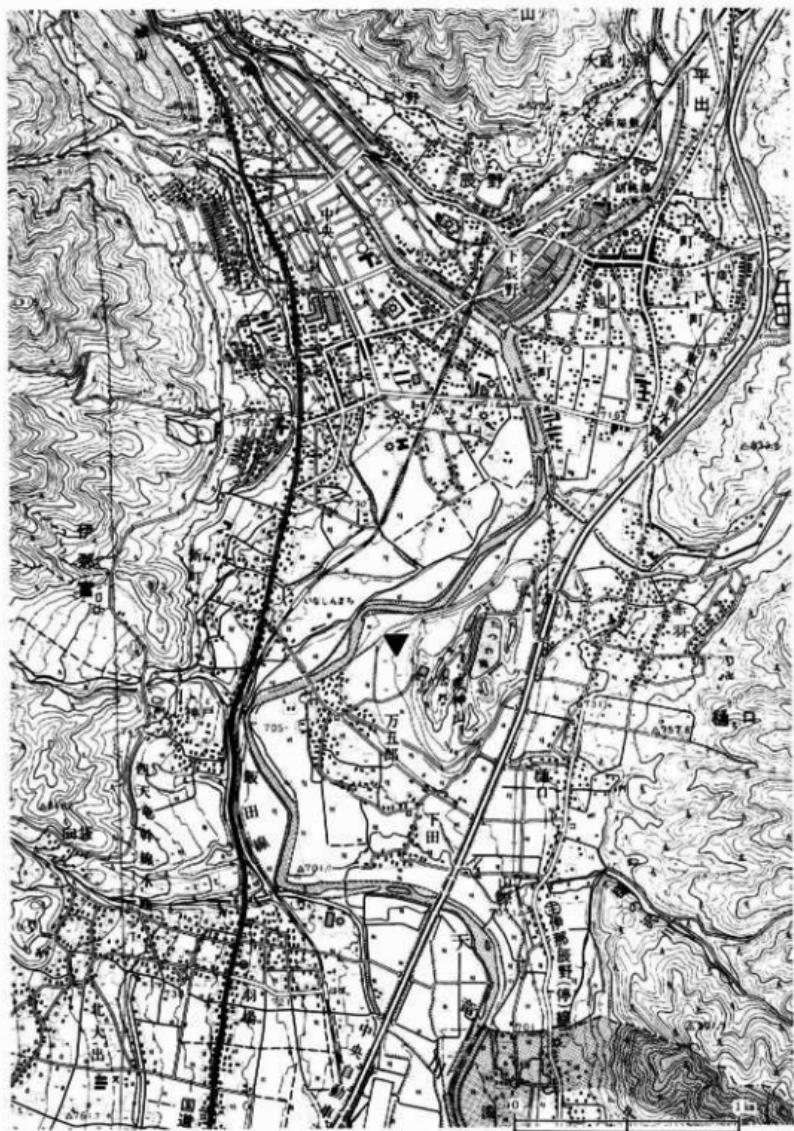
図版 1-1 遺跡遠景		図版13-1 第2号住居址出土遺物（4）	
2 試掘区域全景（1）		2 第3号住居址出土遺物（1）	
図版 2-1 試掘区域全景（2）		図版14-1 第3号住居址出土遺物（2）	
2 試掘区域全景（3）		2 第3号住居址床出土遺物（3）	
図版 3-1 調査区全景（西から）		図版15-1 第3号住居址床出土遺物（4）	
2 調査区全景（東から）		2 第3号住居址床出土遺物（5）	
図版 4-1 第1号住居址		図版16-1 第3号住居址出土遺物（6）	
2 第1号住居址埋甕炉		2 第3号住居址出土遺物（7）	
図版 5-1 第2号住居址		図版17-1 第3号住居址出土遺物（8）	
2 第2号住居址埋甕炉		2 第3号住居址出土遺物（9）	
図版 6-1 第3号住居址（1）		図版18-1 第3号住居址出土遺物（10）	
2 遺物出土状況		2 第5号土坑出土遺物	
図版 7-1 第3号住居址（2）		3 ピット及び第1号土坑出土遺物	
2 第3号住居址埋甕炉		図版19-1 第1号住居址出土縄文土器	
図版 8-1 第5号土坑		2 第3号住居址出土縄文土器	
2 第1号土坑		図版20-1 遺構外出土遺物（1）	
図版 9-1 第1号竪穴		2 遺構外出土遺物（2）	
2 調査風景		図版21-1 遺構外出土遺物（3）	
図版10-1 第1号住居址出土遺物（1）		2 遺構外出土遺物（4）	
2 第1号住居址出土遺物（2）		図版22-1 遺構外出土遺物（5）	
図版11-1 第1号住居址出土遺物（3）		2 遺構外出土遺物（6）	
2 第2号住居址出土遺物（1）		図版23-1 遺構外出土石器（1）	
図版12-1 第2号住居址出土遺物（2）		2 遺構外出土石器（2）	
2 第2号住居址出土遺物（3）			

第1章 調査の契機と経過

辰野町のはば中央部に位置する荒神山は昭和45年を皮切りにスポーツ公園として開発され、辰野町のスポーツ振興の一翼を担ってきた。しかし近年スポーツ施設の老朽化が著しく、利用者の要望もあり、昭和63年に荒神山西麓を買収し、総合的な再開発を実施することが計画され、その一部にプール建設事業が加えられていた。この予定地は荒神山西遺跡として周知の遺跡となっていたため、工事を実施するに先立って平成元年5月に辰野町役場建設課より辰野町教育委員会に保護協議の要請があり、協議を実施した結果、この建設計画の用地4haはすべて荒神山西遺跡の包蔵地に該当していることが判明、面積が広いために充分な調査期間と人員の確保が必要な旨を説明した。

同年7月に2回目の保護協議を実施し、平成元年度事業として工事を実施したい旨、さらに地権者の要望で収穫後に調査を実施してもらいたい旨の説明をうけた。しかしこの時点ではすでに別の発掘調査を行っており、この調査が平成元年12月までかかる予定のために、当該年度の調査は期間的にも難しいのではないかという教育委員会との見解に大きな食い違いをみせた。その後担当係長の間で調整を図り、平成元年度のうちに発掘調査を実施することと決定し、平成元年12月27日より試掘調査を開始した。まず、事前に行った踏査では遺物の採集量が少なかったために遺跡の分布は指定範囲すべてにわたっているとは考えられず、また、遺構面までは地表面よりもかなり深い位置にあると推定された。しかしこの予想に反して、遺構面は耕作土直下層より検出されたものの山麓によった部分という位置的な制約のためか、分布範囲は調査対象地区の北部にかぎられていた。またこの遺構の分布する範囲の南側には、東西に舌状の小規模な丘陵がのびており、この丘陵上には遺構が確認されなかった。

平成2年1月24日に試掘調査が完了したのに伴い、再び保護協議を行い、試掘調査を実施した範囲内でも遺構を確認した1,800m²を本調査することとし、1月29日より調査を開始した。



第1図 遺跡位置図

第2章 位置と環境

第1節 地形・地質

辰野町は西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は小式城山塊、北部は東山丘陵と呼ばれており、東山丘陵は辰野町の丘陵の中でも最もなだらかな丘陵地帯である。

また、辰野町の中央部付近には、町を南北に縱断するように南流する天竜川と、その支流である板橋川等によって浸食されて形成された残丘である荒神山があり、この荒神山周辺では段丘がよく発達しており、特に南麓では多いところでは6段の段丘が形成されている。一方、東側は板橋川等によって一大湿地帯が形成され、平成元年の試掘調査においても、板橋川の河川より東部一帯では粘土質の層が堆積し、一部ではシルト層も確認されている。

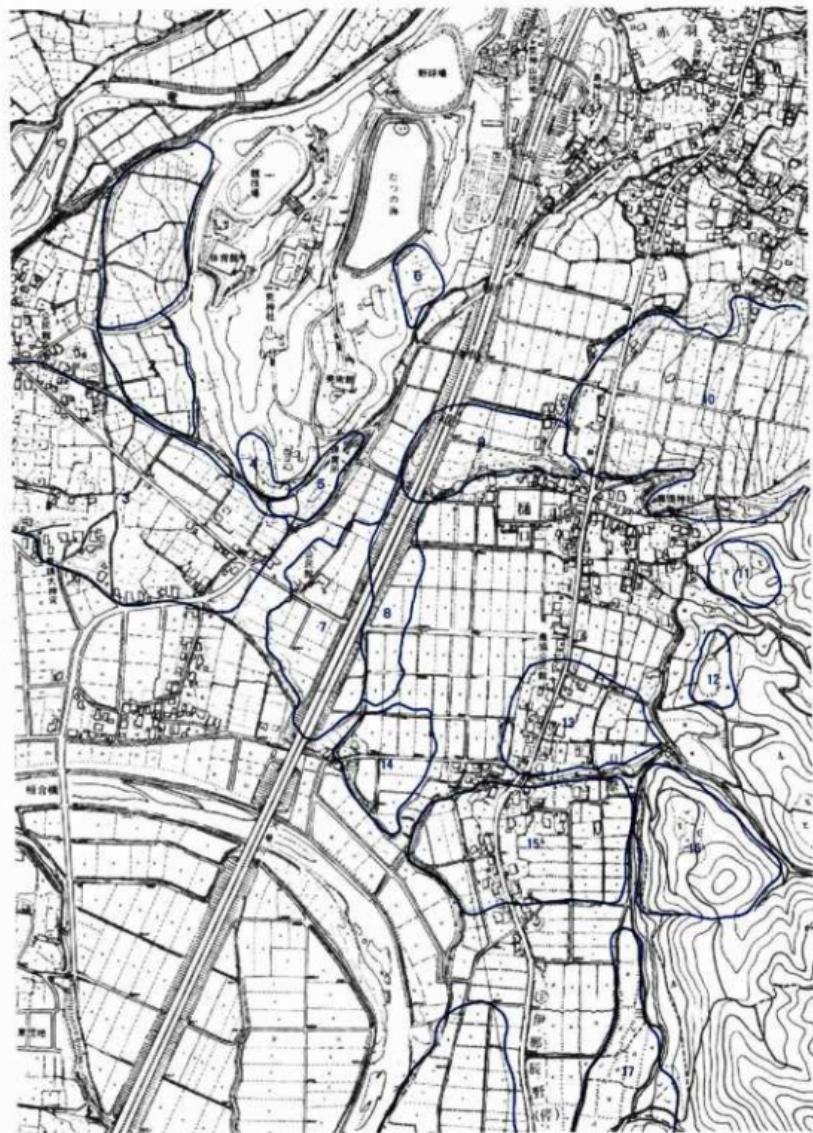
荒神山西遺跡はこの荒神山の西裾部の第一段丘上に存在している。この段丘は横川層に相当する層であるチャート・粘板岩・砂岩などの礫や砂で構成された基盤上に中期から新期のテフラ層をのせており、この面を天竜川が浸食して段丘を形成している。また、荒神山の山裾側では山麓から流出した土砂が厚く堆積し、西側の段丘先端部に向かうにしたがって薄くなっている傾向がある。

第2節 歴史的環境

荒神山西遺跡の所在する荒神山周辺には多くの遺跡が集中している。

荒神山は前述のように天竜川と、その支流による浸食によって形成された残丘であり、山裾部分には段丘が形成されている。この段丘上には弥生時代を中心とした遺跡が所在している。荒神山東山麓には荒神山東遺跡、水久保尻遺跡がある。この両遺跡は平安時代の土師器、須恵器が採集されている。発掘調査は行われていないが、平安時代後半期に展開されているいわゆる開墾集落と思われる。また、板橋川をはさんだ東部の東山よりの土砂の押し出しで形成された扇状地に所在する樋口内城遺跡は、眼下に天竜川下流を一望することができる。この遺跡は中央自動車道の建設に伴って発掘調査され、弥生時代の住居址が約60基出土し、弥生時代中期から後期にかけての集落址が出土した。また、柱状片刃石斧や偏平片刃石斧が出土し、石包丁も出土している。更に磨製石鎌とその未製品も出土しており、磨製石鎌は弥生時代の遺跡が集中している樋口地区でも、この樋口内城遺跡に限られており、注目される遺跡である。

樋口五反田遺跡は板橋川、矢沢川等といった天竜川の支流が形成した湿地帯の中に所在する微高地に位置し、中央自動車道建設に伴って行われた調査では15基の弥生時代の住居址と、2基の



第2図 周辺遺跡分布図

方形周溝墓が発掘された。この方形周溝墓は住居址と重なって出土しており、周溝内からは古式土師器が出土している。また、圃場整備に先立って実施した2次調査では11基の弥生時代の住居址が出土し、鉄斧、偏平片刃石斧、石包丁等が出土している。なお16号住居址からは0.3%ほどの炭化米が出土している。

荒神山南麓にいたると、山麓ではあるが、窪烟遺跡、荒神山南遺跡、段丘上には荒神山おんまわし遺跡がある。

窪烟遺跡では平安時代の住居址4基、縄文時代中期の住居址1基が出土し、その他黒鉛土器が一括して出土している。

荒神山南遺跡は縄文時代中期中葉の住居址1基が出土している。

荒神山おんまわし遺跡は平成元年度より3ヶ年、圃場整備と県道拡幅事業に先立って調査が実施され、縄文時代の遺構としては住居址2基、土坑5基他、集石群が出土し、遺物としては押型文が100片あまり出土している。弥生時代では9基の住居址や、13基の方形周溝墓が出土し、周溝墓からは鐵劍が出土している。また、平安時代の遺構として住居址が43基出土し、鐵製紡錘車をはじめ、鎌、鐵、刀子、鋤先等が出土し、ほかにも火災住居の出土など、大きな成果をあげている。

さらに荒神山西遺跡と、荒神山おんまわし遺跡との間に所在する荒神山南麓遺跡（仮称）は平成3年度に発見されたもので、踏査の折に住居址と思われる遺構の覆土中より須恵器壺が出土している。

No.	遺跡名	縄文時代					弥生時代	古墳時代	奈良時代	中世以降	備考
		早期	前期	中期	後期	晩期					
1	荒神山西	○	○	◎	○		◎	○	○	○	
2	荒神山南麓			○					○		
3	荒神山おんまわし	◎	○	◎			◎		◎		
4	荒神山南			◎							
5	窪烟	○		○			○		○		
6	荒神山東								○		
7	樋口五反田	○		◎			◎	◎	○		
8	荒神社矢沢			◎			◎		○		
9	樋口内城	○	○	◎	○		◎	◎	◎	◎	
10	矢沢原遺跡群	○	○	○			○	○	○		
11	姫御前口			○			○		○		
12	樋口上ノ原	○									
13	山際			○					○		
14	星敷前			○							
15	八反田						◎				
16	鼠田			○							
17	飛岡			○							

周辺遺跡一覧表 (○は遺物出土、◎は遺構出土を示す)

第3章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要

荒神山西遺跡は荒神山ウォーターパークの建設に伴う緊急発掘調査であり、今までに一度も調査が実施されていないため、遺構の分布状況や、土層等は明確には記録されていなかった。そのため、国土座標にそって10m四方の基準方眼を設定し、この1基準内を25ヶ所のグリッド（2m × 2m）に設定し、このうちの1ヶ所を試掘して分布調査を実施した。グリッドは基点から磁北方向を数字、東西方向をアルファベットで表現した。

分布調査を実施した結果、開発対象地区内においては北部に位置する約1,800 m²の範囲に遺構を検出することができた。そのため、この範囲を中心と本調査を実施することとした。この遺跡は荒神山から流出した土砂によって旧地表面とは大きく地形が変化しており、一部谷地形が埋没している事も判明したが、本調査を実施した地点は包含層も薄く、遺構もローム層上層より掘り込まれているものと考えられた。遺構の保存状態は耕作によるかくらんの影響はほとんどなかった。このため、ローム層直上層まで重機による表土剥ぎを行い、以下は手作業で進めた。遺構検出にはジョレン等を使用し、遺構の掘り下げには移植ゴテ等を使用した。なお、土坑などは半カットの状態で掘り下げ住居址は土層あぜを残すなどし、遺構内の土層観察と記録につとめた。

出土遺物の取り上げは表土から遺構確認面まではグリッド別に行い、遺構内の遺物は各遺構別に取り上げ、必要に応じて適宜出土位置やレベルを記録し、図化及び写真撮影を行ったものもある。整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺物番号を註記した。現場での撮影には一眼レフ2台を使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影は大型カメラにより、6×9モノクロームネガフィルムを使用した。

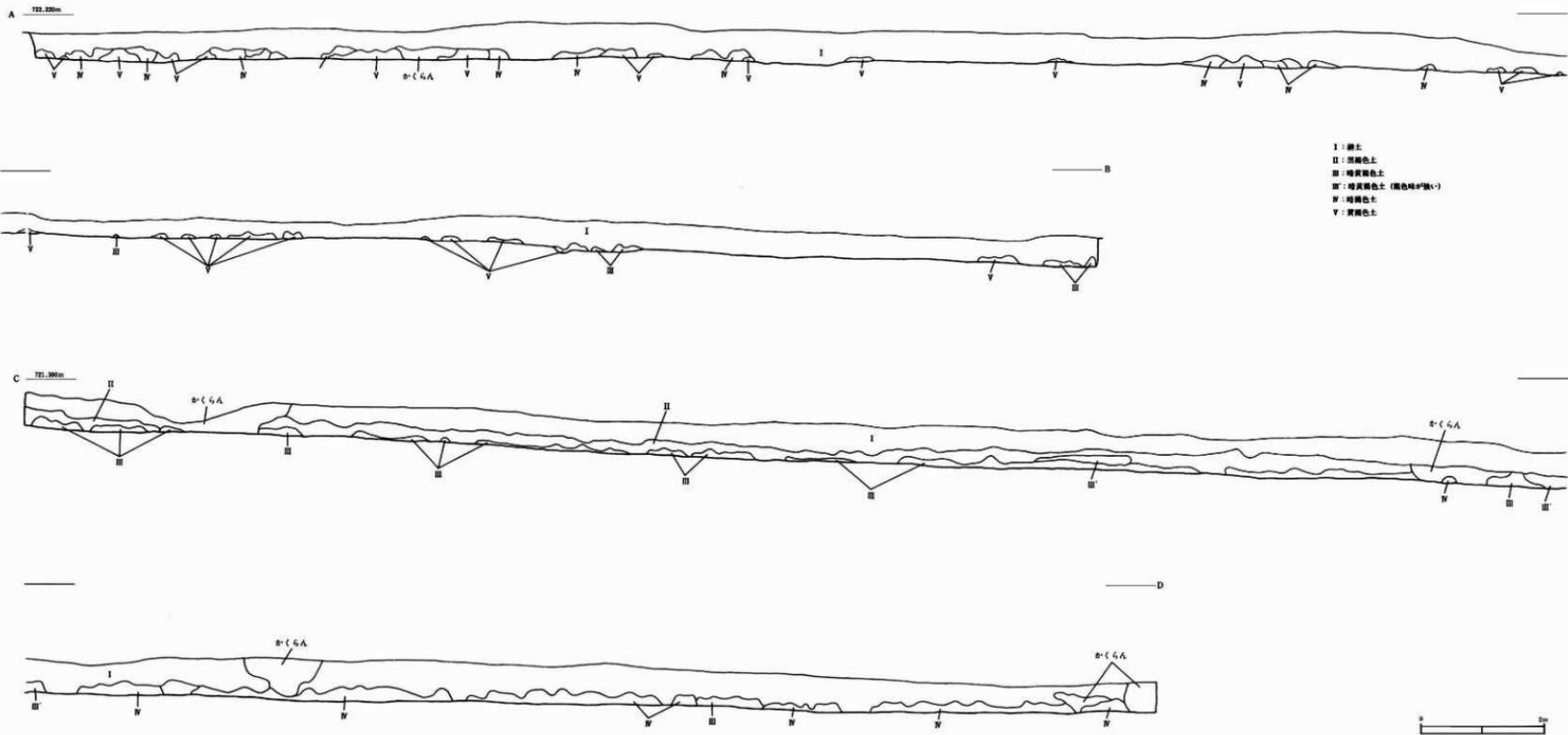
今回の調査の出土遺構、遺物の概要是次のとおりである。

1. 積穴住居址4基（弥生時代）

2. 土坑6基

3. ロームマウンド5基

出土遺物総点数は1,469点である。



第3図 発掘調査区土層断面図

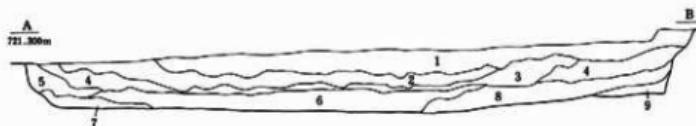
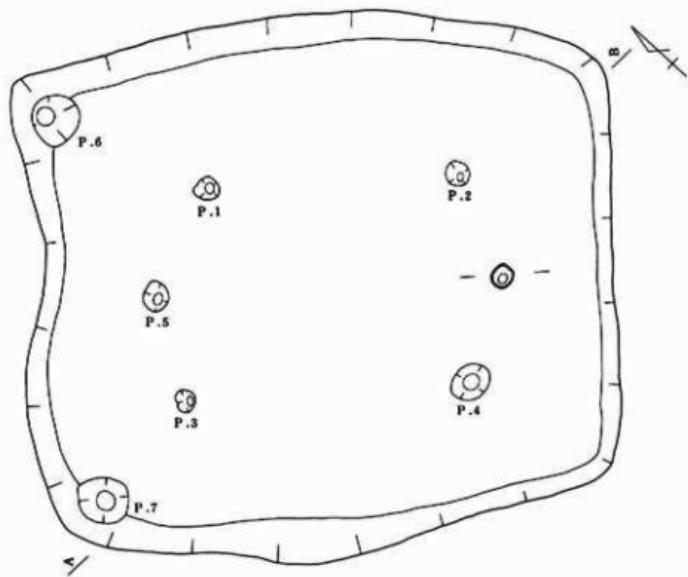
第4章 遺構と遺物

第1節 住居址

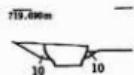
第1号住居址

この住居址は調査区の西側中央付近より出土している。プランは $6.5\text{m} \times 5.5\text{m}$ の隅丸長方形であり、北西壁と西南壁がやや弯曲して掘り込まれているので、壁高は遺構検出面よりおよそ75cmの深さである。覆土は比較的やわらかく、全体的に暗褐色系の土で占められている。床面はよくしまっており、周溝は認められなかった。主柱穴はP.1(深さ9.5cm) P.2(12.4cm) P.3(15.5cm) P.4(14cm)の4本と考えられる。また、北西壁の両隅にはP.6(直径約50cm、深さ37.1cm) P.7(直径約50cm、深さ22.1cm)が検出されている。炉は埋甕炉であり、南東よりに甕の口縁部と、体部下半を欠いて逆位に埋設されていた。焼土はほぼ円形に広がっているが、あまり多くは使用していなかったようである。

遺物 遺物は細片が多いため、器形の判明するものは少なく、図示したものがほとんどである。1~3は甕の破片である。1は頸部付近であり、振幅の比較的小ない5条1単位のクシ描波状文が施されている。外面は剥落している部分もあり、焼成はあまり良好とはいえない。2も頸部であり、7条を1単位とするクシ描波状文が施されている。内面は丁寧にミガキがかけられ、焼成も良好である。3は口縁部でこの破片の下部には小刻みに振幅する波状文が施されている。さらにその上部には波状文が省略されたかとも思われる振幅のない横位のクシ描文が施されている。4は小型の壺または甕と考えられる土器の体部下半である。実測図は反転復元しているが実際には非常に歪んだ土器である。底部には指圧調整が一面に施されている。外面は体部の中ほどまでは縦位のミガキがほぼ全面に施されており、下部ではその後に横位のミガキを施している。内面は縦のミガキが粗雑に施された後に横位のミガキが密に施文されている。底部には指圧調整が施されている。胎土は密であり焼成も良好である。5は埋甕炉に使用されていた土器である。口縁部及び体部下半は欠損している。外部の頸部下部には8条1単位のクシ描波状文が2段施文され、体部はハケ調整を縦横に施した後に縦方向のミガキをやや粗雑に施している。内面は粘土紐を積み重ねた際の接合痕を留めているものの、体部全面にハケ調整が施されている。胎土は砂等はほとんど含んでおらず密である。また、焼成もしっかりしており良好な状態であった。6は甕の体部と思われ、外面は縦位のミガキを丁寧に行い、内面は器壁前面に縦横のミガキを施している。7は甕の体部上半である。6条1単位とした小刻みな振幅のクシ描波状文を2段施文した後に丁寧なミガキを器壁に施し、波状文のほとんどの部分をミガキによって磨り消している。



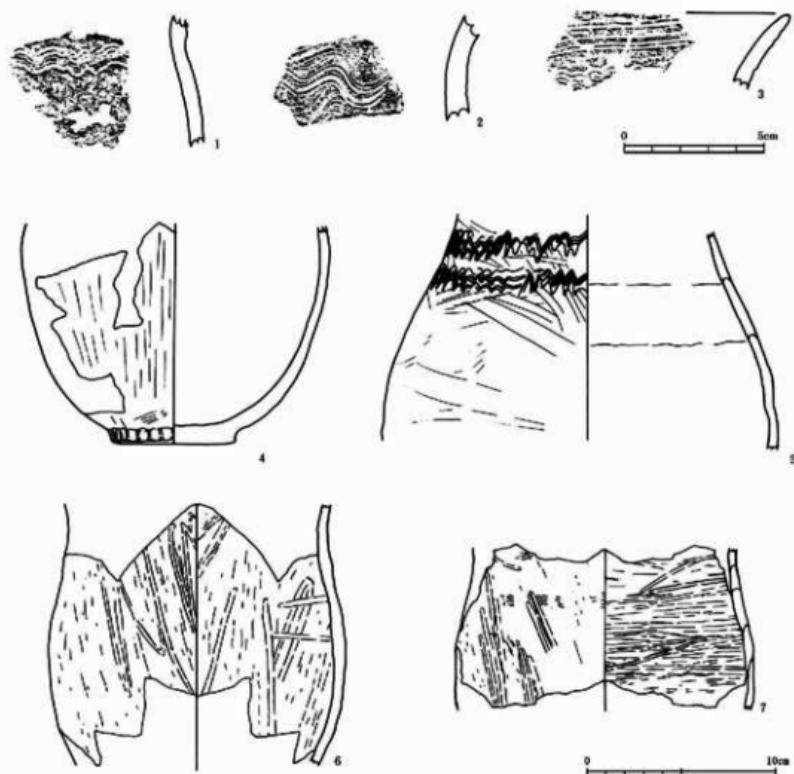
- | | |
|-----------|----------------------|
| 1 : 増褐色土 | 6 : 増黄褐色土 (黃色土多量に混入) |
| 2 : 黑色土 | 7 : 增黄褐色土 (黄色粘泥人) |
| 3 : 增黄褐色土 | 8 : 增黄褐色土 |
| 4 : 增褐色土 | 9 : 黑褐色土 |
| 5 : 增褐色土 | 10 : 增黄褐色土 (燒土や中混入) |



0 2m

0 50cm

第4図 第1号住居址実測図

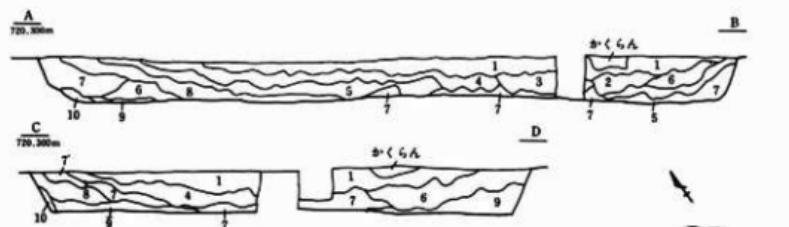
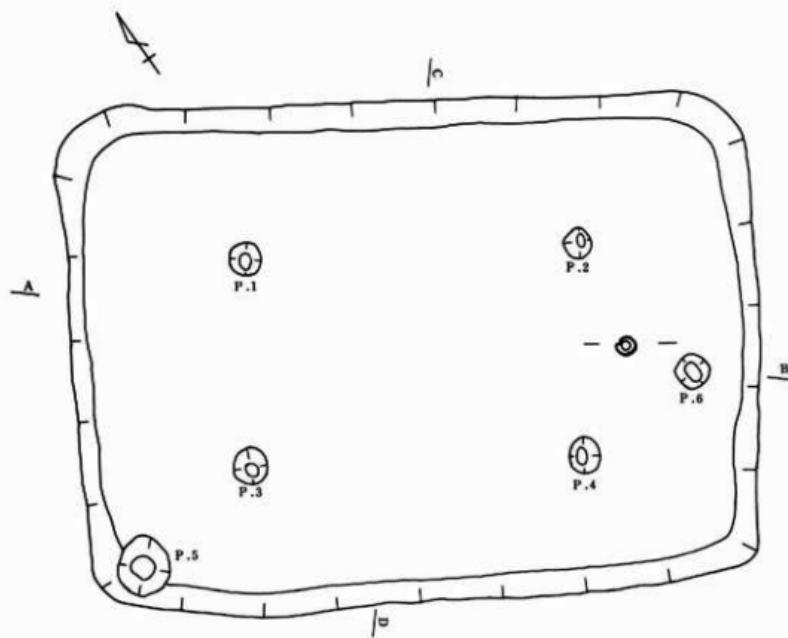


第5図 第1号住居址出土遺物

第2号住居址

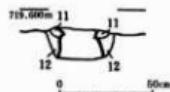
調査区の東側B F - 43付近を中心として検出された。プランは $7.5\text{m} \times 7.5\text{m}$ の隅丸長方形であり、北隅がやや外側まで掘り込まれている。検出面からの深さは約50cmで、黒色系の覆土が堆積していた。主柱穴はP.1(深さ57.3cm) P.2(57.3cm) P.3(63.5cm) P.4(57.7cm)の4本と考えられ、南東側に埋甕炉が埋設されている。この炉の周囲に広がる焼土はあまり広くではなく、浅い。北西隅には直径約56cm、深さ約39.9cmのピットが掘られている。床面は全面に貼床が施されていた。埋甕炉は甕の体部下半を欠いて正位に埋めてあった。また、住居址北側床面より出土した土器片は埋甕炉の体部下半に接合している。

南壁側には図示しえなかつもののわずかな高まりがあり、この住居址の出入口を考えることができる。

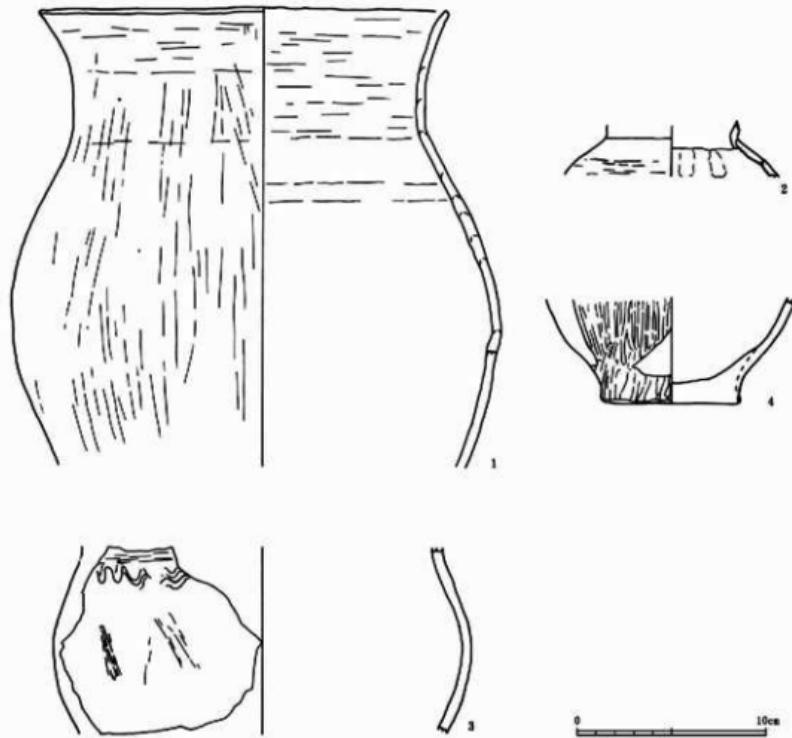


- 1: 黒色土（やや褐色味を帯びる） 7: 噴褐色土（褐色味が強い）
 2: 褐褐色土 8: 噴灰褐色土（灰色味が強い）
 3: 黒色土 9: 噴黃褐色土
 4: 暗色土（やや褐色色に近い） 10: 黄色土
 5: 黑色土（噴褐色土混入） 11: 粘土
 6: 噴褐色土

0 2m



第6図 第2号住居址実測図

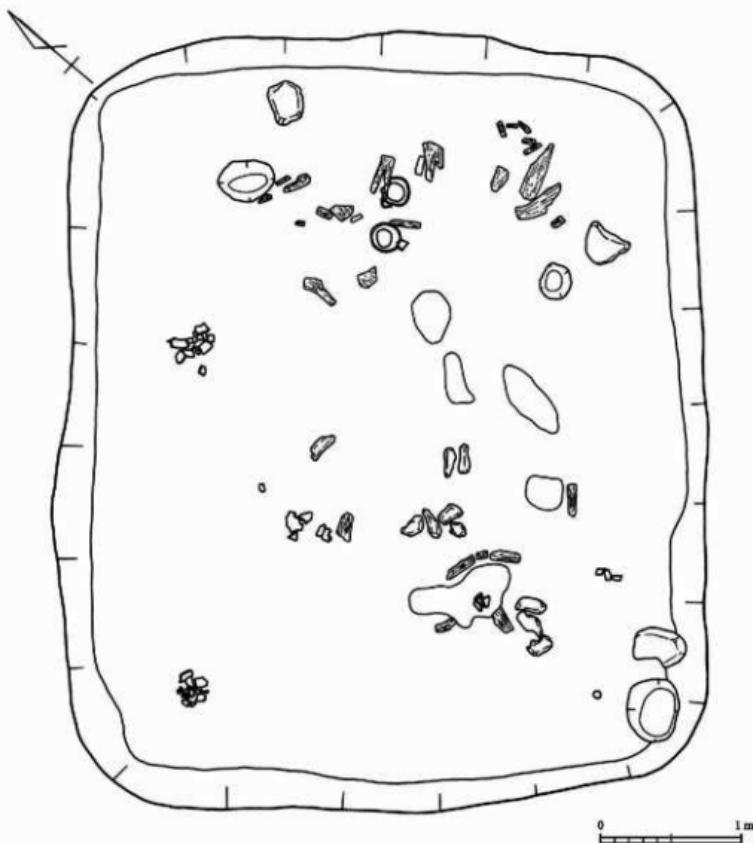


第7図 第2号住居址出土遺物

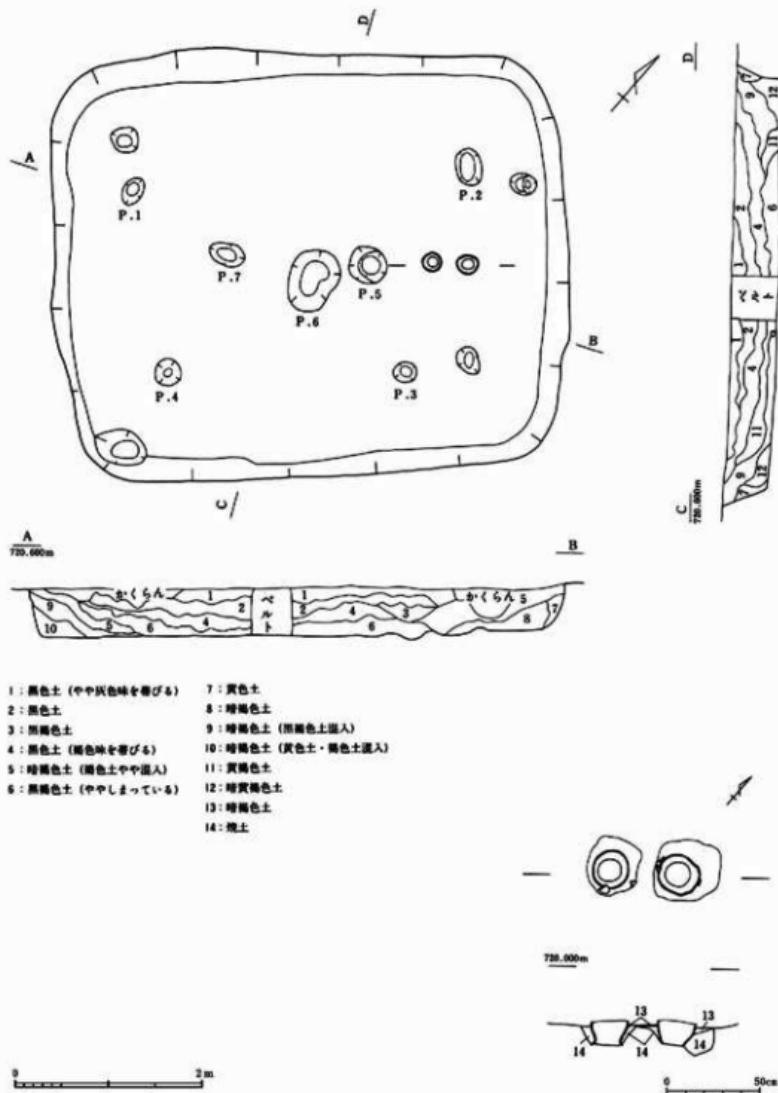
遺物 第2号住居址は出土遺物が少なく、図示することができたのは4点であった。1は埋甕に使用された甕である。クシ描文は施されておらず、頸部下部には縦位のミガキを密に施している。また口縁部は横位のナデが丁寧に施されており、内面は全面横位のナデが施されている。2は壺の体部上部である。器壁は薄く、外面は横位のナデ調整を施し、内面は指圧調整痕を留めしており、接合痕が十分に消えていない。3は甕の体部である。頸部付近に不明瞭なクシ描波状文が1条施文されており、その上部は横位のナデ調整を施している。体部にはヘラミガキを粗雑に行っている。内面はナデ調整と思われるが焼成不良のためにはっきりしない。4は底部である。外面は全面縦位のヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。また、この住居址からは赤色塗彩された土器片が5片出土しており、このうち2片は表裏に塗彩している。

第3号住居址

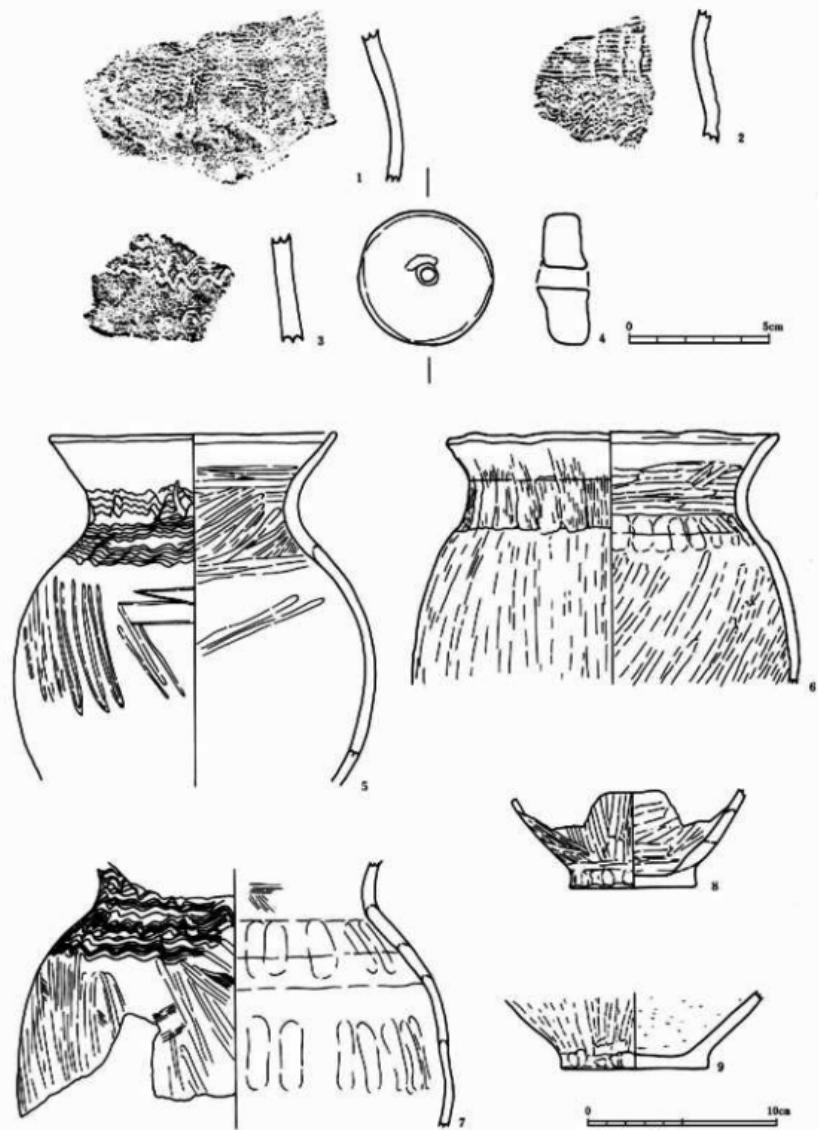
この住居址はBL-28より出土しており、 $5.6\text{ m} \times 4.6\text{ m}$ の隅丸長方形のプランで、遺構検出面より約60cm掘り込んでいる。床面は比較的平らで、全面に貼床が施されている。柱穴はP.1(深さ10.3cm) P.2(38.0cm) P.3(55.9cm) P.4(44.5cm)と推定される。炉は埋甕炉であり2ヶ所で検出された。土層を観察すると北側の炉が先に使用されていたと推定される。またこの住居址は炭化材が若干出土しており、焼土も検出されていることから火災にあった住居址と考えられる。床直上からは多くの土器片が出土しているが図示できたのは第10図-8のみであった。



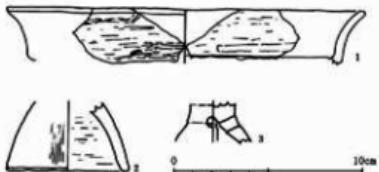
第8図 第3号住居址実測図(1)



第9図 第3号住居址実測図(2)



第10図 第3号住居址出土遺物(1)



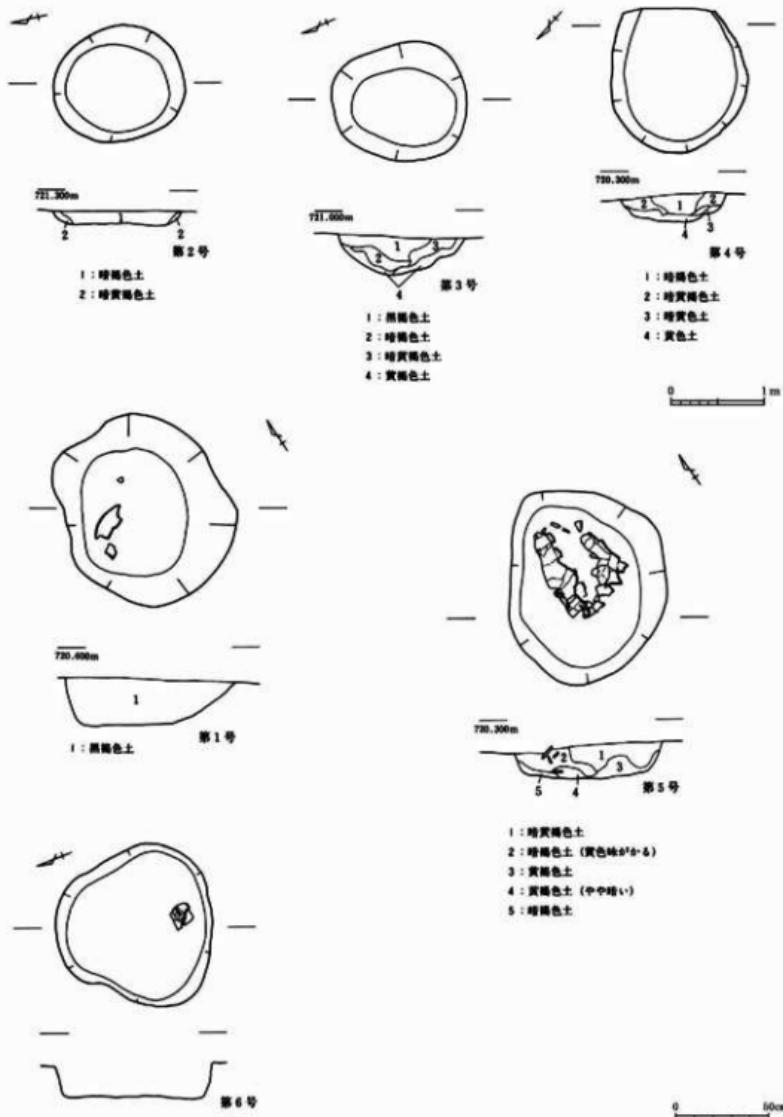
第11図 第3号住居址出土遺物(2)

部にまでおよんでおり、厚く堆積している。このことよりこの炉の使用頻度は高かったものと推測される。

この住居址は床中央付近に3ヶ所のビットが検出されている。これらのビットはこの住居址に伴っているものと思われ、それぞれP.5(深さ11cm) P.6(6cm) P.7(11cm)とそれほど深いものではない。また、南隅には土坑があり、深さはおよそ26cmである。

遺物 この住居址から出土した遺物の量が、今回調査を行った3住居址の中で最も多かった。1～3は甕の破片である。1は7条1単位のクシ描波状文を、現存で2段施文している。振幅は小さいものの比較的丁寧な波状文である。施文方向は右から左へと行っている。2は9条1単位のクシ描簾状文の下に振幅の小さなやや粗雑な波状文を施している。施文順は不明である。3は6条1単位の比較的粗雑なクシ描波状文を現存で2段施文している。4は土製の紡錘車である。焼成前に垂直に穿孔している。5は甕である。体部は球形に近く、頭部は大きくてくびれ、直線的な口縁部へとつながっている。また、6条1単位のクシ描波状文を頭部から体部上部にかけて3段施文している。体部は粗いヘラミガキを上下に連続的に施文している。内面は体部上部から口縁部下半まで縦位または横位のヘラミガキを密に施している。6・7は埋葬炉に使用した土器であるが、両者ともしっかりとした土器である。6は全面にヘラミガキを施した甕であり、頭部と体部の境界には縦位の強いナデによって段が作られている。体部は密に縦位のヘラミガキとし、内面は口縁部上半と頭部下半を除いて一面にヘラミガキを行っている。口縁部上半はヨコナデ調整を行ってヘラミガキを消している。また、頭部下半には体部と頭部を接合する時に残された指圧調整が残されている。7は口縁部と体部下半が欠損しているが、7条1単位のクシ描波状文を右から左へ現存で4段施文している。体部は斜位のヘラミガキとクシ描波状文を施文した後にやや粗く施文している。8・9は底部で、8は住居址西隅の床直上より出土している。体部下半は縦位のヘラミガキを施し、底部には指圧調整が残されている。内面には斜位または横位のヘラミガキを施している。9は体部下半にヘラミガキを行っており、内面は横位のヘラミガキの痕跡を留めている。第11図-1は高環の口縁部である。体部下半で屈曲して外反ぎみにたちあがる器形と思われ、内、外共に丁寧なヘラミガキを行っている。2は台付甕の脚部である。ややふくらみぎみにたちあがっており、外面には縦位のハケ調整、内面には横位のナデ調整を施している。3は高環の脚部上部である。比較的大きく広がっていくものと推定され、上部には円形のすかしが開かれている。

その他の破片は底部や体部が中心である。この破片の中には甕の体部上半で粗痕のついたもの(図版14-2)も出土している。これらの遺物は埋葬炉の周囲には少なく主として北西よりの床面より出土している。埋葬炉はいずれも甕の体部中部以下を欠いて逆位に埋設している。焼土は埋葬炉の底



第12図 土坑実測図

第2節 土坑

第1号土坑

AW-47より出土した約1m×1mの不整円形であり、深さはおよそ25cmで、断面は皿状になつておき、覆土は全面に黒褐色であった。

遺物 この土坑からは土器片が多数出土したが、図示できたのは第13図-5のみであった。この土器は、口縁内屈の深鉢の破片であり、体部の屈曲部にはヘラ状工具によって施したキザミがある。また、口縁部は同じくヘラ状工具を使用しての施文を行っているが、地文はなにもなかつた。なお、この土器の現存する部分の外面には赤色塗彩された痕跡が残されていた。

第2号土坑

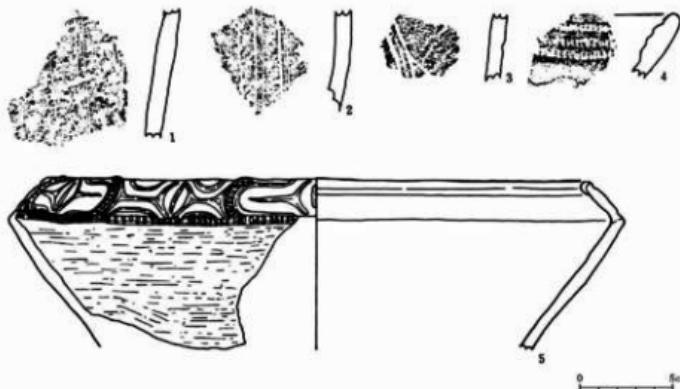
AU-40より出土した約1.5m×1.2mの椭円形であり、断面は皿状を呈している。深さはおよそ13cmで、暗褐色の覆土であった。

遺物 遺物は出土していない。

第3号土坑

B B-31より出土しており、約1.5m×1.3mの椭円形で、断面は擂鉢状になっている。覆土は暗褐色系の土で占められていた。

遺物 遺物は出土していない。



第13図 土坑出土遺物

第4号土坑

B I -37より出土した約1.3m×1.4mの不整円形の土坑である。覆土は全体的に暗褐色系の土であり断面は皿状を呈している。深さはおよそ25cmである。

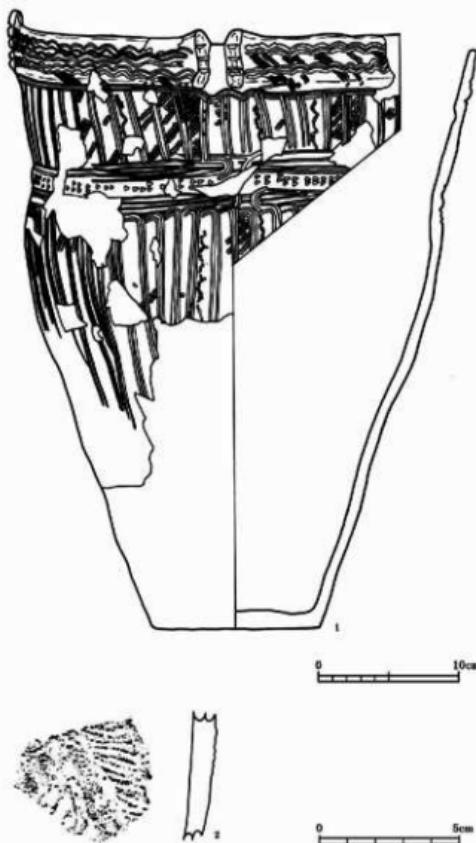
遺物 遺物は出土していない。

第5号土坑

この土坑は調査区の北西よりにあるBO-35より検出された。およそ1.1m×0.8mの梢円形で、深さは約20cmであった。この土坑内には平出III A系の深鉢が1個体床面付近より出土しているが、土坑上部がかくらんをうけているために個体の半分が失われていた。

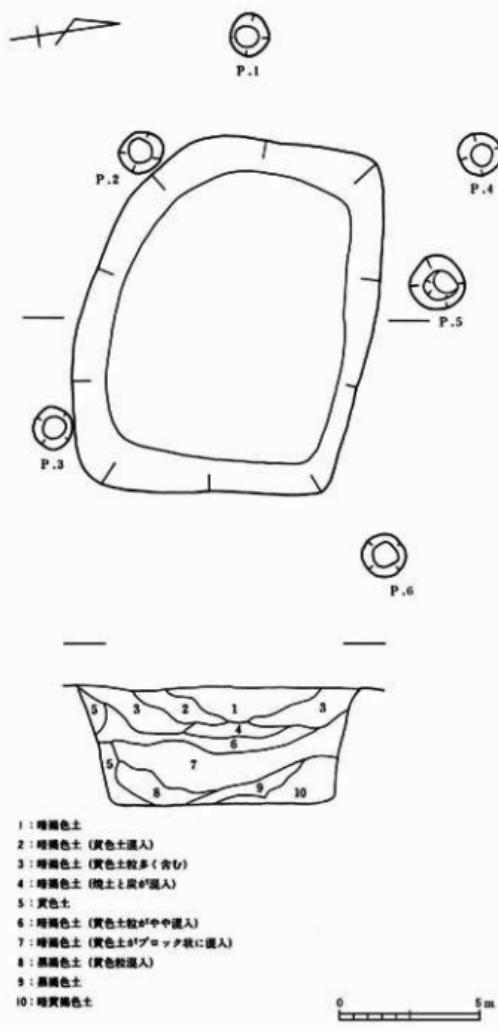
遺物 第13図-1～3および第14図-1は平出III A系の土器である。第13図-1・2は体部上部であり、半截竹管状工具による縦位の並行沈線文を施している。3は並行沈線文を施す前に地文として縄文を施している。第14図-1は底部から体部上部まで直線的にやや広がりながらたちあがっている。口縁部上端部で一度しまってからやや開きぎみに口唇部にいたっている。口縁部上端部には2個の突起を1単位とした4単位の突起があり、それぞれに垂下する隆帯を貼り付けている。くびれ部は竹管状工具による刺突をし、その上下に並行沈線文をひいて区画文としている。口縁部は並行沈線による波状文を2条施文し、体部は縦位の並行沈線を施している。また、器面全体には粗雑ではあるが縄文が地文として用いられている。

第14図-2は縄文を施した土器である。



第14図 第5号土坑出土遺物

第3節 その他の遺構と遺物



第15図 第1号竪穴実測図

第1号竪穴

この遺構は今回の調査区の南東隅付近であるAW-46より検出された。東西2.5m、南北2mのやや形のくずれた長方形を呈しており、遺構検出面よりほぼ垂直に掘り込まれている。深さはおよそ80cmであり、床面はほぼ水平でややしまっていた。壁面はやや弱くなっていたものの覆土は比較的軟らかく、暗褐色系の土を中心とした各層には黄色土が混入しており、土層の状況からは時期が若干新しいと考えることができる。また、この竪穴の周囲には6ヶ所のピットが確認されており、それぞれP.1(深さ14.4cm) P.2(21.5cm) P.3(28.7cm) P.4(28.1cm) P.5(31.3cm) P.6(16.9cm)となっている。竪穴自体の主軸と比べてやや北へずれているようではあるが、ピットの間隔がP.1とP.2が約1m、P.4とP.5も約1m、P.2とP.3が約2m、P.5とP.6が約2mと南北でそろっていることから、この竪穴に付随したピットと考えることができる。

遺物 この遺構からは遺物は出土しなかったため、時期を確定することはできない。

第1号ロームマウンド

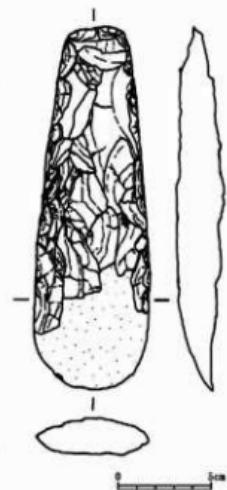
BK-39より検出された。東西2.8m、南北2.2mの梢円形プランであり、ロームブロックの下方にまでローム混じりの黒褐色土が入り込んでいる。深さは現存で52cmである。また、遺構検出面直上層が耕作土であったため、ロームブロックの上部は削り取られてしまっている。

第2号ロームマウンド

東西2.2m、南北2.4mの不整円形のプランであり、ロームブロックの下方は褐色系の土で占められている。現存で28cmの深さを測るが、ロームブロックの上部はやはり削り取られている。

第3号ロームマウンド

東西3.4m、南北2.2mの梢円形をしており、ロームブロックは小さく、その周囲は黄色系の土が覆っている。また、マウンドの外周は全体的に褐色系の覆土が占め、堀り込みは現存で24cmと浅い。



第16図 第1号ピット遺物

第4号ロームマウンド

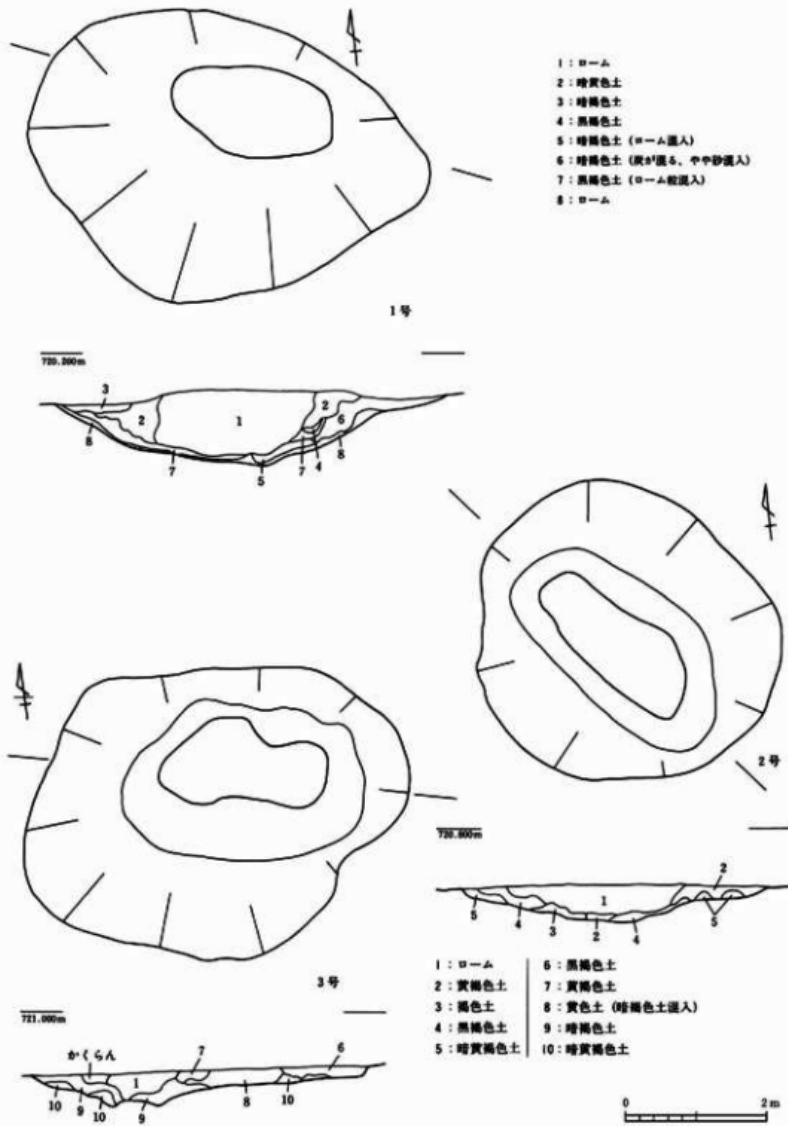
BG-30より検出されている。東西3.6m、南北2.4mの梢円形プランであり、ロームブロックは現存で約20cmと薄く残存している。堀り込みは現存で40cmであり断面は皿状になっている。暗褐色土の混入したロームがこのロームブロックを覆っている。

第5号ロームマウンド

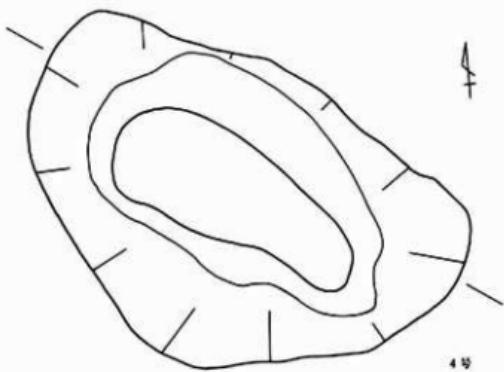
東西2m、南北1.8mの不整円形のプランであり、ロームブロックは地山のローム層まで及んでいる。現存している深さは32cmであり、周囲は黄色土混じりの褐色系を中心とした土で覆われていた。

ピット出土遺物

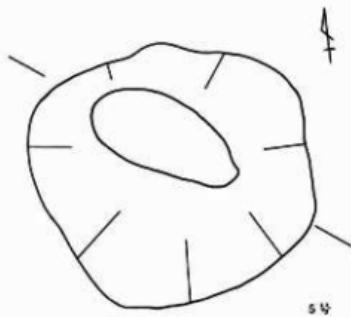
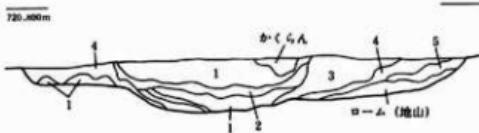
第16図の打製石斧はBC-34のピットより出土したものである。粘板岩系の石を使用し、刃部にむかうにしたがって幅が広くなっていくいわゆる短冊型である。表の刃部には自然面を残しているものの、その他の部分は全面よく打ち欠いて加工されている。基部も体部から徐々に薄くなっていくように仕上げられており、全体的に丁寧に加工されている。



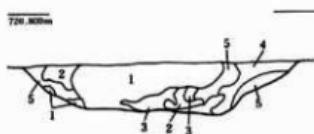
第17図 ロームマウンド実測図(1)



4号



5号



- 1 : ローム
- 2 : ローム (特質褐色土混入)
- 3 : ローム (特質褐色土多く混入)
- 4 : 黒褐色土 (黒色土混入)
- 5 : 塗黄褐色土 (黄色味強い)



第18図 ロームマウンド実測図 (2)

第4節 遺構外出土の遺物

縄文時代中期の土器

第19図-1~15は縄文時代中期初頭、梨久保式の土器である。1は口縁部である。口唇部に連続爪形文を施し、その下部は半截竹管状工具を使用しての並行沈線文による格子目状の文様でうめられている。2~9は口縁部下半である。いずれのものも、横位の並行沈線によって区画された文様帶の中に、半截竹管状工具による並行沈線文を縦位に綿密に施したのちに斜位または、横位のヘラ状工具による沈線を引くことにより、格子目状の文様を表現しているもの(2・9)や斜位の並行沈線文と斜位のヘラ状工具による沈線を組み合わせて、格子目状に施文しているもの(4・6)がある。また、3は区画された文様帶の上端部と下端部に、それぞれ半截竹管状工具による横位の連続刺突文を施している。

口縁部下部の区画文様は、3~5本の横位の半隆起線文(1・4・5・7・9)のものと、半隆起線文と横位の連続爪形文を施しているもの(3)がある。

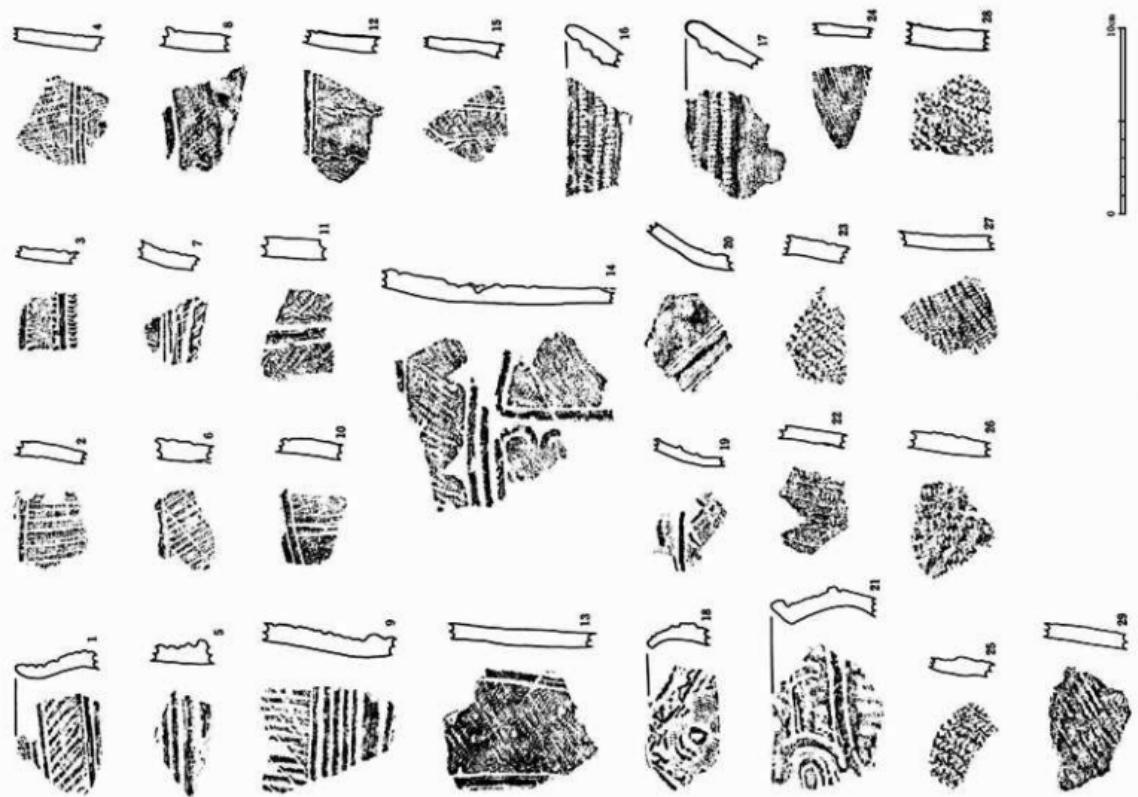
体部については縄文系のものしか図示しえなかつたものの、結節のある縄文を施しているもの(11・12)や、縄文を地文として縦位の並行沈線を施文しているもの(10・11・15)がある。なかでも15は変形Y字文に並行沈線文を施している。13・14は縄文を地文として並行沈線を区画文とした印刻文状に施文している。8は口縁部下半部であり、縄文を地文として上部に区画文としての半隆起線文を施している。

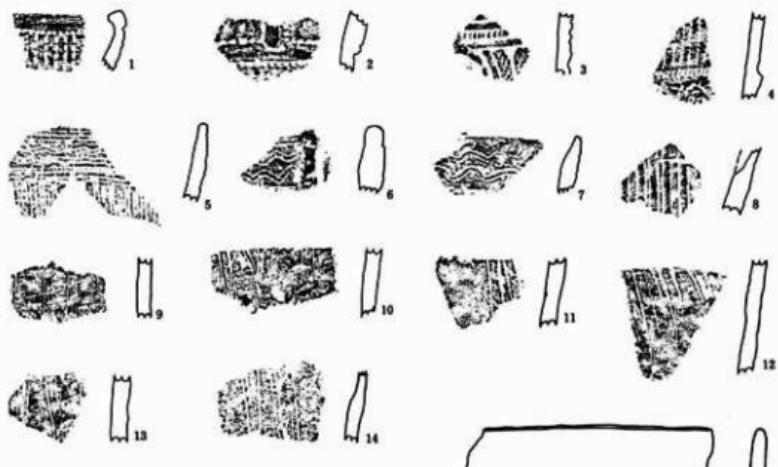
16・17・20・21・第20図-1~4は中期中葉の土器である。16・17は浅鉢の口縁部である。外側には何も施文されていないものの、内面の上部には共に3条の竹管状工具による押引文を施している。20は体部の破片であり、隆帯を斜位に貼り付け、その両脇に沈線を施している。21は口縁部である。角押文によって挟まれた隆帯を区画文とし、その区画内を隆帯と角押文によって充填している。第20図-1は口縁部であり、横位の角押文を施したその下部に縦位の角押文を施している。2~4は体部の破片である。隆帯の両脇に角押文を施し区画文としているもの(2)や半截竹管状工具によっての押引文によって文様帶を区画しているもの(3)がある。3は区画文の下には縄文を地文としてヘラ状工具による沈線で施文している。4は縦位の角押文の下に爪形文の区画文を施し、下部にも角押文を施文している。5~14は平出III Aである。5~7は口縁部であり、2条または3条の半截竹管状工具によって並行沈線文が描かれている。5はその下部に縦位の並行沈線文を密に施している。6は4単位の突起のうちのひとつであり、押圧隆帯を垂下させている。8は体部上部であり並行沈線を密に施文している。9~14は体部下半の破片で、いずれも縦位の並行沈線文を施している。15は有孔鈎付土器であり、鈎は小さいもののその鈎上にやや波状ぎみに穿孔を行っている。

縄文時代後期の土器

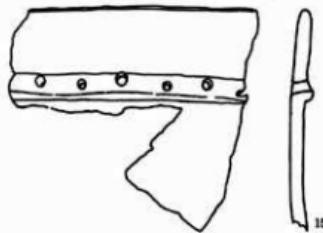
16~18は後期の土器である。16は横位に磨り消し縄文を施したものである。17は焼成も良好で

第19圖 繩文土器拓影圖(1)





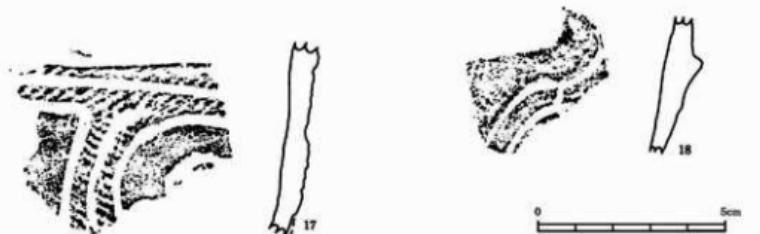
0 10cm



0 15cm



0 15cm



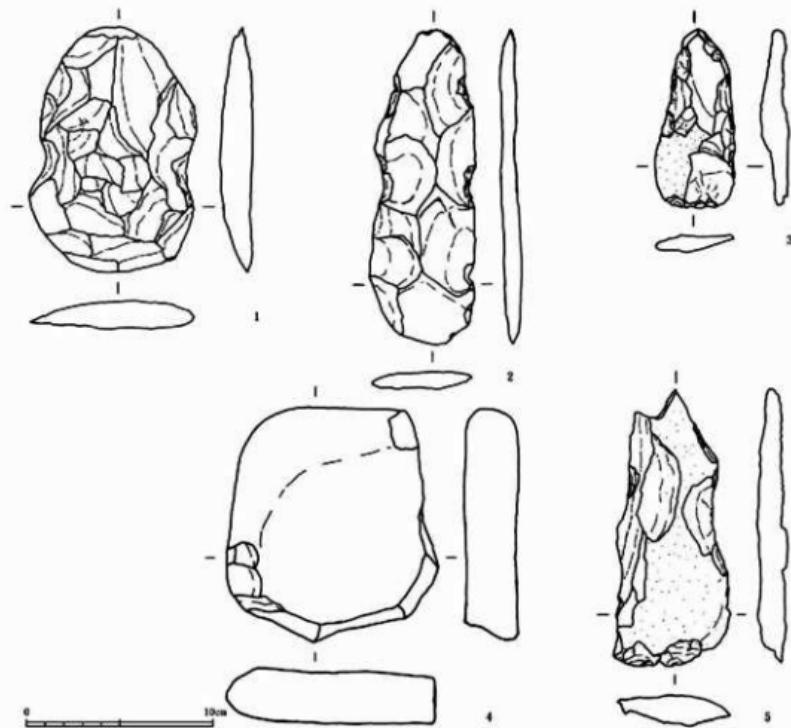
0 5cm

第20図 繩文土器拓影図(2)

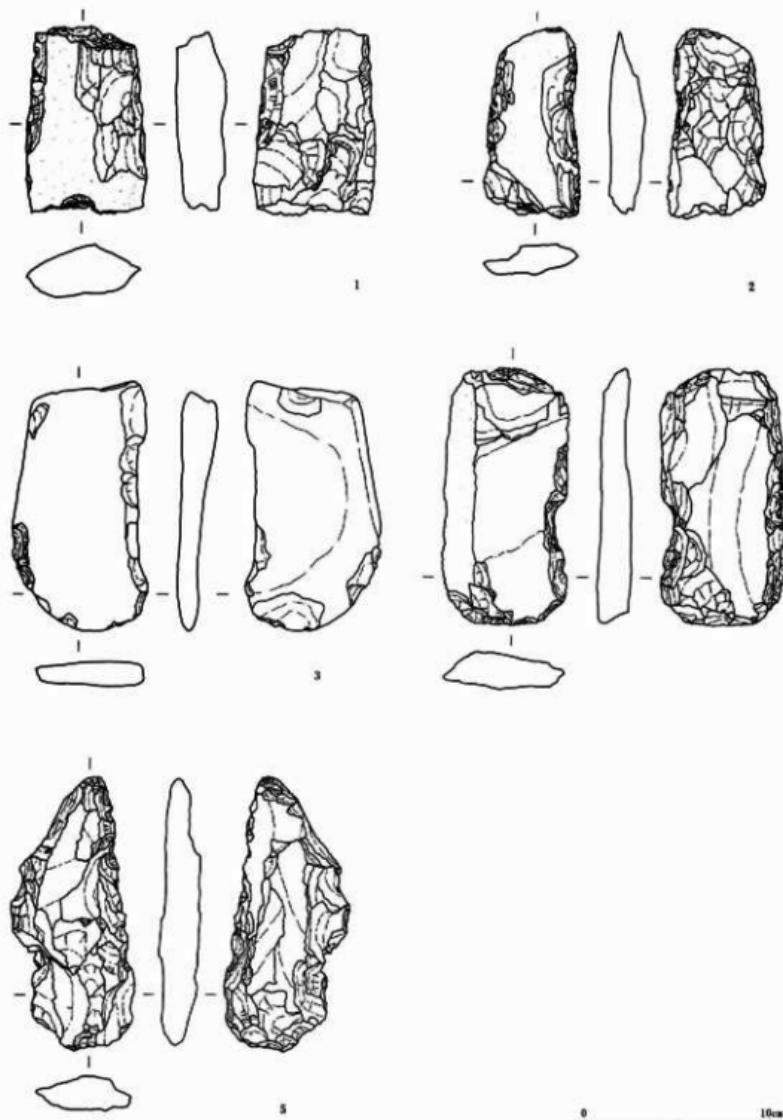
あり、明褐色を呈し、磨り消し繩文によって渦巻文を施していると考えられる。18は破片上部に突起を貼り付けていたようであるが、欠落している。

石器

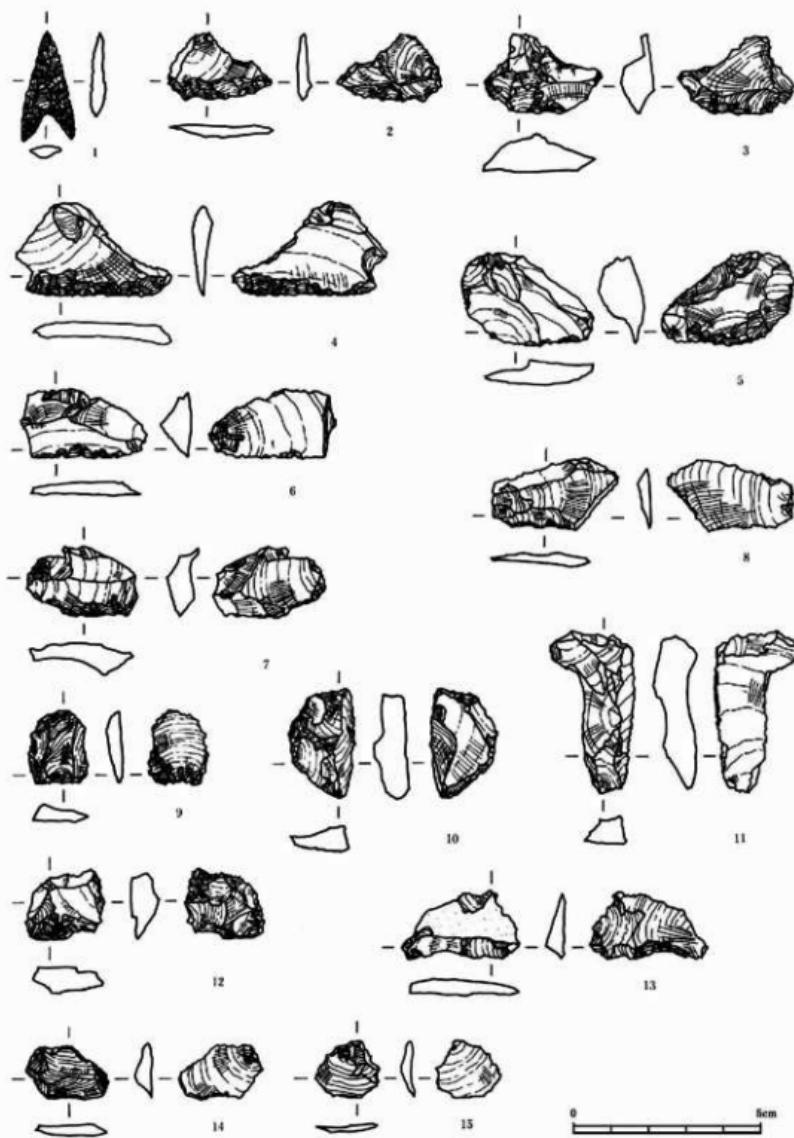
遺構外からは第21図～第24図の石器が出土している。第21図－1～3・5と第22図は、打製石斧である。1と2は砂岩製のもので、1は中央付近に抉りが入れられた分銅形の石斧である。刃部はやや彎曲し、基部はやや尖りぎみとなっている。2もやはり刃部は彎曲し、基部は尖りぎみに仕上げられている。两者ともに石質がもろいために、加工痕を明瞭にはとどめていない。3は小型のもので、表面は自然面を一部残しているもののよく手が加えられている。5は基部を欠損している。粗雑なつくりで自然面を多く残し、一部整形のために加工が加えられている程度である。刃部もあまり丁寧な成形とはいえない。3・5は粘板岩を使用している。



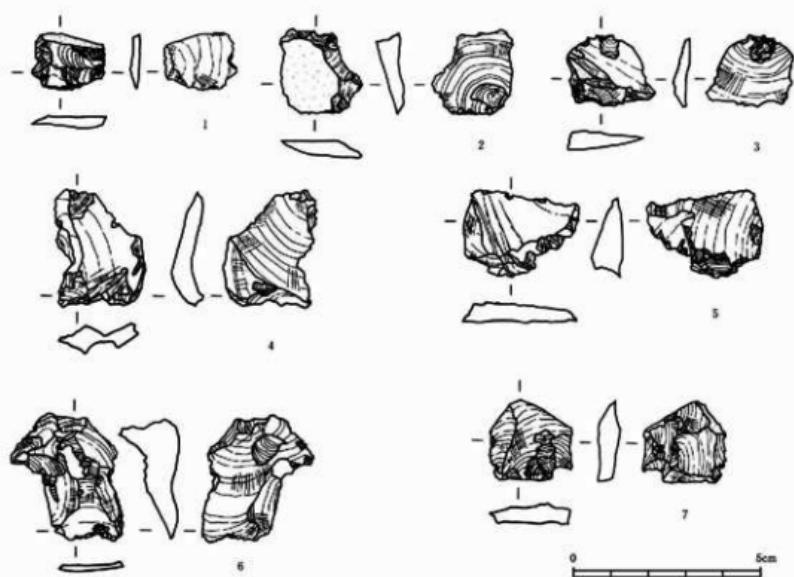
第21図 遺構外出土石器(1)



第22図 遺構外出土石器(2)



第23図 遺構外出土石器 (3)



第24図 遺構外出土石器(4)

4は砥石である。欠損しているものの、中央部はややくぼんでいる。安山岩を使用している。第22図-1は基部と刃部を欠損しているもので、表面に自然面を残しているものの比較的整った形をしている。2は刃部が欠けている。表面は自然面を多く残し、基部は薄く仕上げている。1・2は粘板岩製である。3は砂岩製であり、第21図-1・2と同様にもろいため、加工痕を明瞭にとどめていない。4は刃部は欠けているが、均一な厚さに作られている。表面に自然面を残し、一面に調整のための剥離が集中している。5は粘板岩製でほぼ完形であろう。基部の先端部は尖らせている。

第23図-1はチャート製の石鎌である。大きさ、形体から弥生時代のものと考えられる。2～5は石匙である。2は小さなつまみをもち、自然面を一部残しながらも刃部は丁寧に仕上げられている。3は厚手で、つまみ部分は欠損している。刃部は粗雑な作りである。4はつまみ部と、刃部の一部が欠けている。刃部は丁寧に整形されている。5は厚手であるが裏面に刃部を加工している。9・10はピエス・エスキューである。9は方形であり、両極ともに断面は尖っている。10は下部が尖っており、両極ともに打撃によるものと思われる剥離がある。11は石錐であるが、先端部は欠損している。6～8・12～15・第24図は使用痕のある剥片である。ほとんどのものが裏面の加工を行っておらず、剥離したままの状態のものを使用している。

第5章 まとめ

荒神山西遺跡は東部を荒神山が、西部を天竜川が占める南北に広がる河岸段丘上に存在している。地理的には北風があり、日照時間も短いため、遺跡の規模としてはあまり大きくはない。

今回の調査ではこの遺跡の東半部で試掘調査を行い、その結果をふまえて 1,800 m² の本調査を実施した。

その結果、弥生時代後期の竪穴住居址 3 基が出土した。これらの住居址は、弥生時代後期の典型的な隅丸長方形の竪穴住居址で、床は全面的によくしまっていた。第 1 号住居址と第 2 号住居址は長軸が南東方向をむいてそろっているが、第 3 号住居址は 90 度程長軸がずれていた。また、各住居址の出土遺物をみると、第 1 号住居址においては図示しているものでも 3 個体は無文の土器であり、クシ描文のあるものでも形のくずれ始めた波状文や直線文が描かれており、橋原式新段階の様相を示している。次に第 2 号住居址をみると、図示できたのは 4 点である。この住居址もやはり無文化の進んだ傾向が伺える。また、クシ描波状文を施しているものも、器面調整のヘラミガキによって消されている。やはりこの住居址も橋原式新段階に該当する。これに対して第 3 号住居址は無文の土器も含まれているものの、クシ描の簾状文や、やや形がくずれているものの波状文を施文した土器も出土している。また、台付甕の台部と思われる破片も出土しており、橋原式中段階に位置づけることができる。

このように、荒神山西遺跡の弥生時代の集落は、2 時期に分類できそうである。

また、今回の調査では出土遺物のなかに大陸系磨製石器の出土がなく、ピットからではあるが打製石斧が 1 点、そのほかにも弥生時代の打製石斧と考えられるものが 2 点出土している。この遺跡の分布する段丘は天竜川との比高はおよそ 8 m と高く、周辺には湧き水等もない。そのため自然条件においても水稻栽培を行う要素は見出せない。このことは、打製石斧の出土とともに陸耕が行われていた可能性を示唆するものであろう。

次に第 1 号土坑より出土した口縁内屈の深鉢は、内屈した口縁部に弧線連結文を施文しているものの縄文を地文として施しておらず、弧線文間を区画する隆帯には、ヘラ状工具によってキザミを入れている。更に赤色塗装した痕跡を残している。この土器は文様構成上は安行 I 式土器と思われる。なお、この土坑は断面皿状であり、ほぼ同じレベルからは縄文時代中期の新道式土器も出土しており、これらの土器は混入品の可能性が強い。

末筆になりましたが、寒風吹き荒ぶ中、現場で直接作業していただいた地元万五郎をはじめとした協力者の方々、ならびに辰野町役場建設課に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- 岡谷市教育委員会 1981 『橋原遺跡』
- 岡谷市教育委員会 1986 『梨久保遺跡』
- 岡谷市教育委員会 1987 『樋沢押型文土器の研究』
- 加藤晋平・小林達雄・藤本強編 1981 『縄文文化の研究』土器II
- 小林達雄編 1989 『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』
- 鈴木道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』
- 竹渕修二 1980 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第1集
- 竹渕修二 1981 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第2集
- 竹渕修二 1982 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第3集
- 辰野町誌編纂委員会編 1989 「地形・地質」 『辰野町誌 自然編』
- 辰野町誌編纂委員会編 1990 「第4章 弥生時代」 『辰野町誌 歴史編』
- 辰野町教育委員会 1990 『荒神山おんまわし遺跡II』
- 長野県教育委員会編 1988 『長野県史 考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物



遺跡遠景



試掘区域全景 (1)

図版 2



試掘区域全景 (2)



試掘区域全景 (3)



調査区全景（西から）

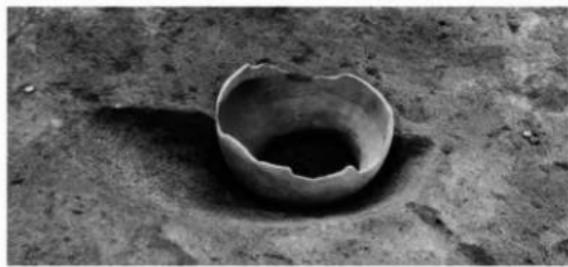


調査区全景（東から）

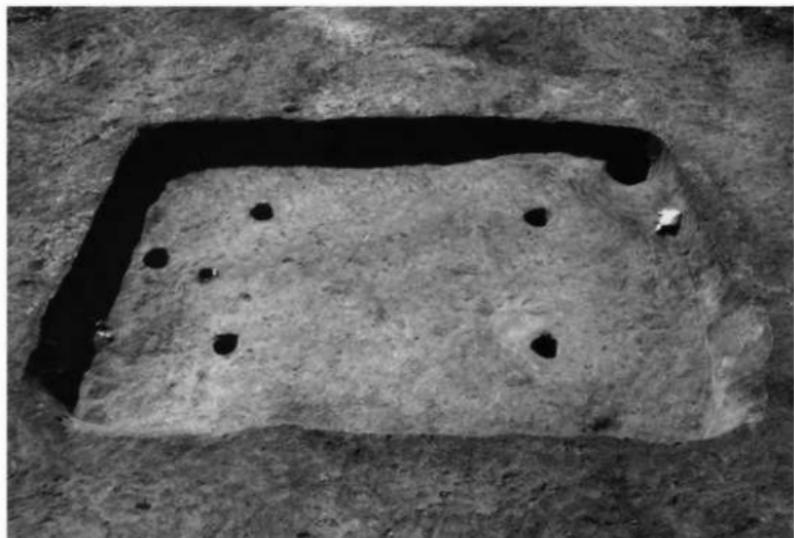
圖版 4



第 1 号住居址



第 1 号住居址埋甕炉



第 2 号住居址

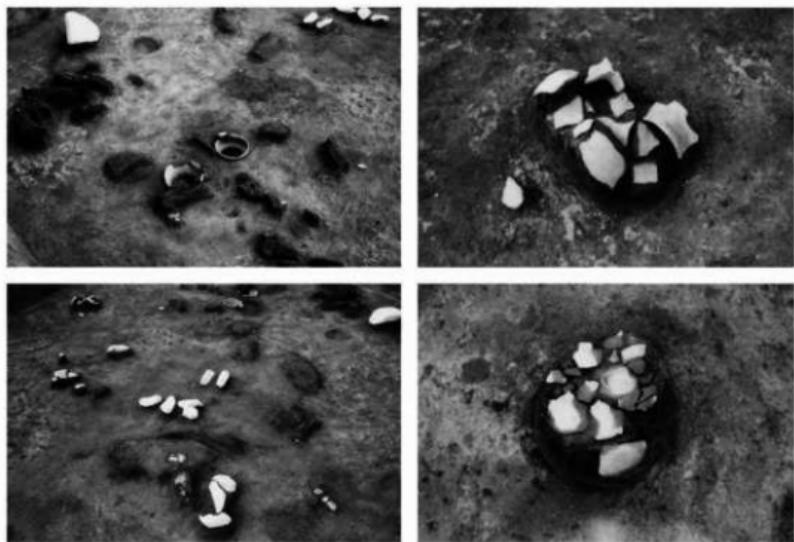


第 2 号住居址埋甕

図版 6



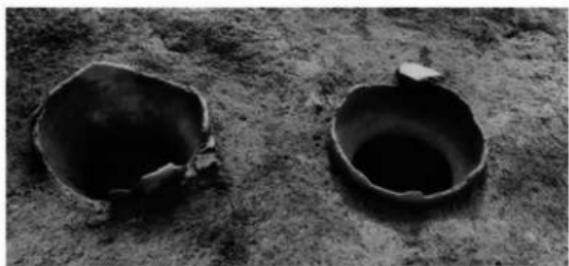
第3号住居址 (1)



遺物出土状況



第 3 号住居址 (2)



第 3 号住居址埋甕炉

圖版 8



第 5 号土坑



第 1 号土坑



第 1 号 竪穴

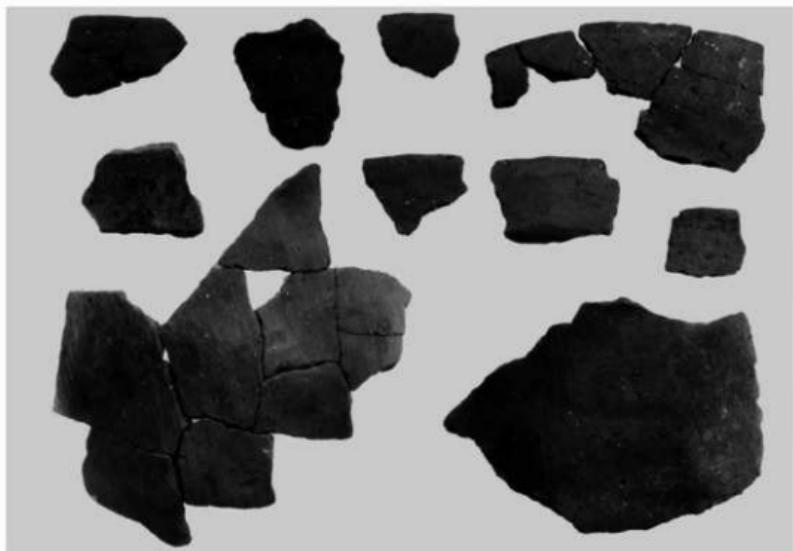


調査風景

圖版 10



第 1 号住居址出土遺物 (1)



第 1 号住居址出土遺物 (2)

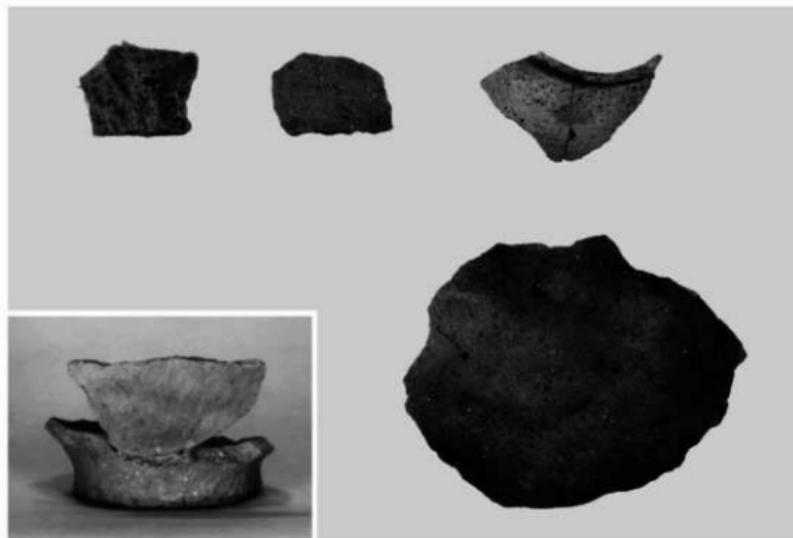


第1号住居址出土遗物(3)



第2号住居址出土遗物(1)

圖版 12



第 2 号住居址出土遺物 (2)



第 2 号住居址出土遺物 (3)



第 2 号住居址出土遺物 (4)



第 3 号住居址出土遺物 (1)

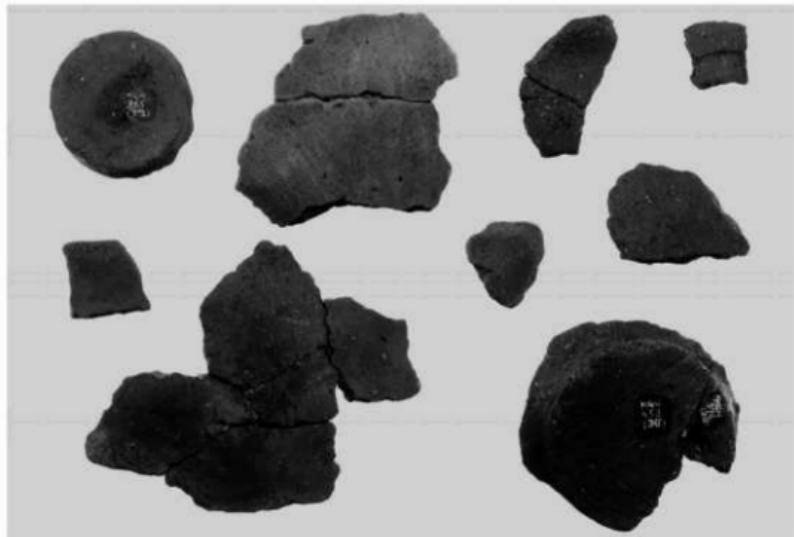
圖版 14



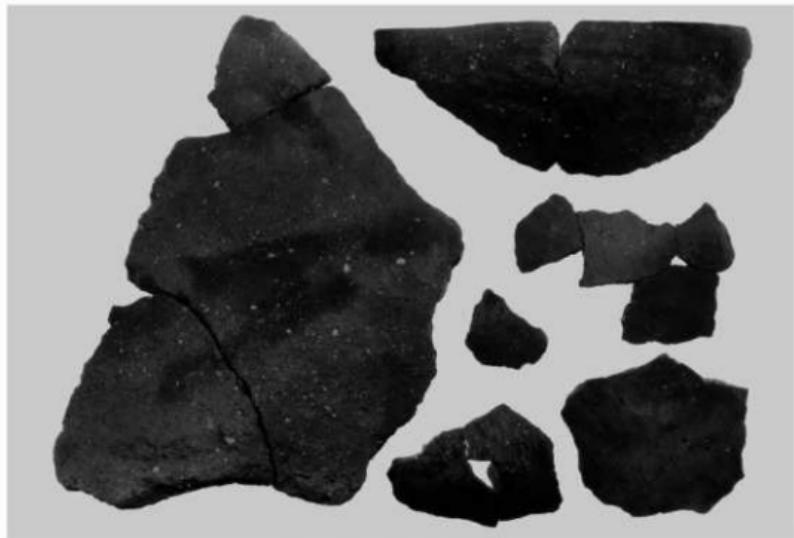
第3号住居址出土遺物(2)



第3号住居址床出土遺物(3)

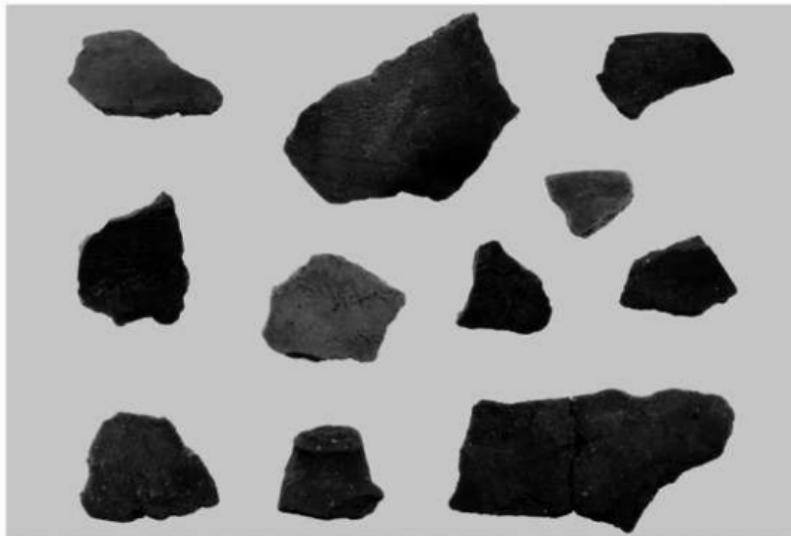


第3号住居址床出土遺物(4)



第3号住居址床出土遺物(5)

圖版 16



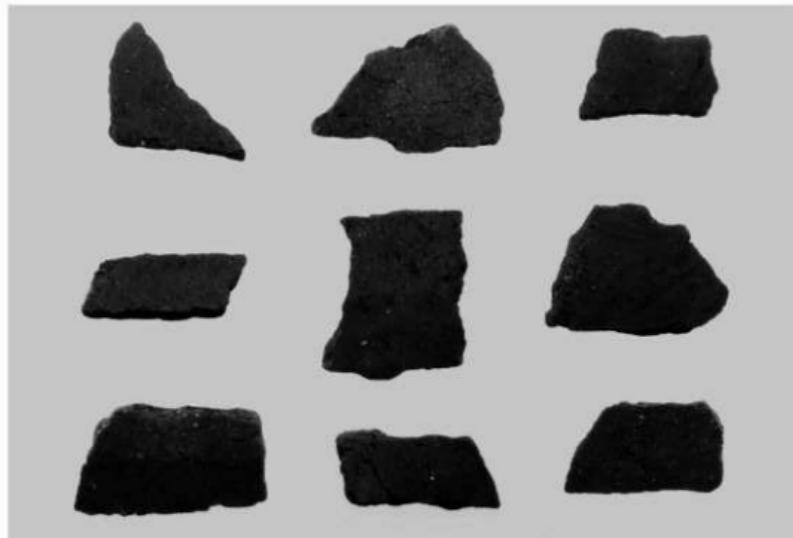
第3号住居址出土遺物(6)



第3号住居址出土遺物(7)

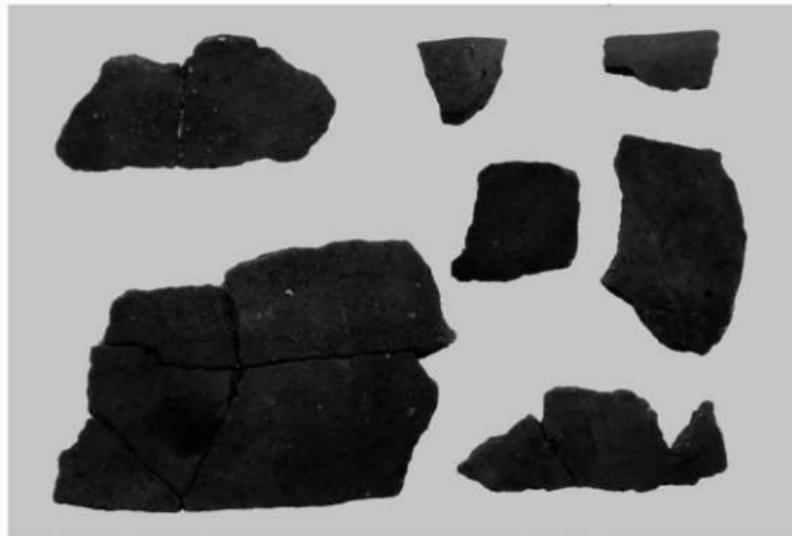


第3号住居址出土遺物(8)



第3号住居址出土遺物(9)

図版 18



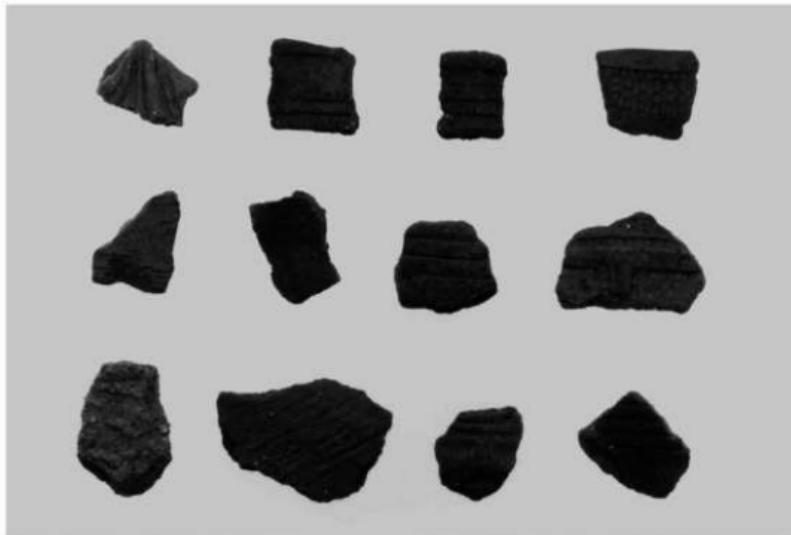
第3号住居址出土遺物（10）



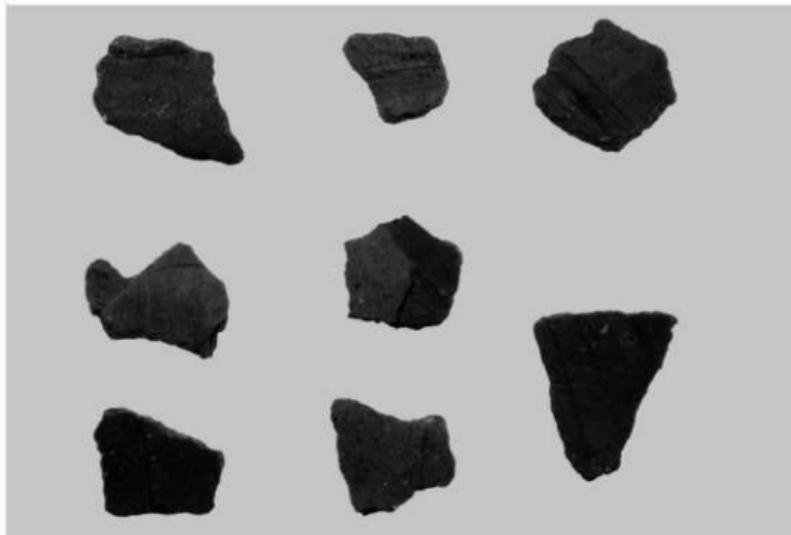
第5号土坑出土遺物



ピット及び第1号土坑出土遺物

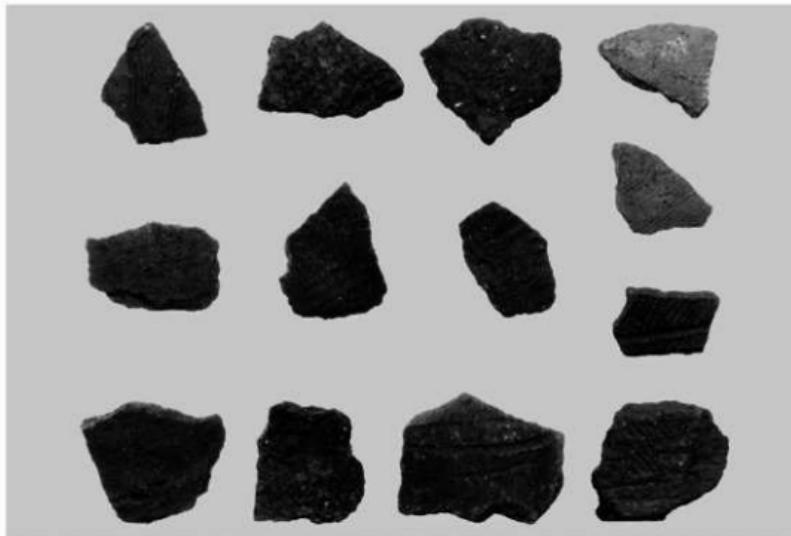


第1号住居址出土縄文土器

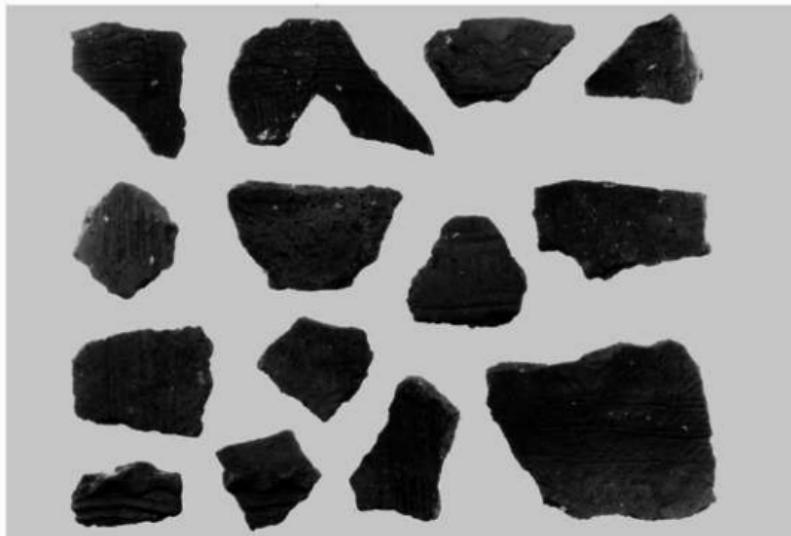


第3号住居址出土縄文土器

圖版 20



遺構外出土遺物（1）



遺構外出土遺物（2）



遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物 (4)

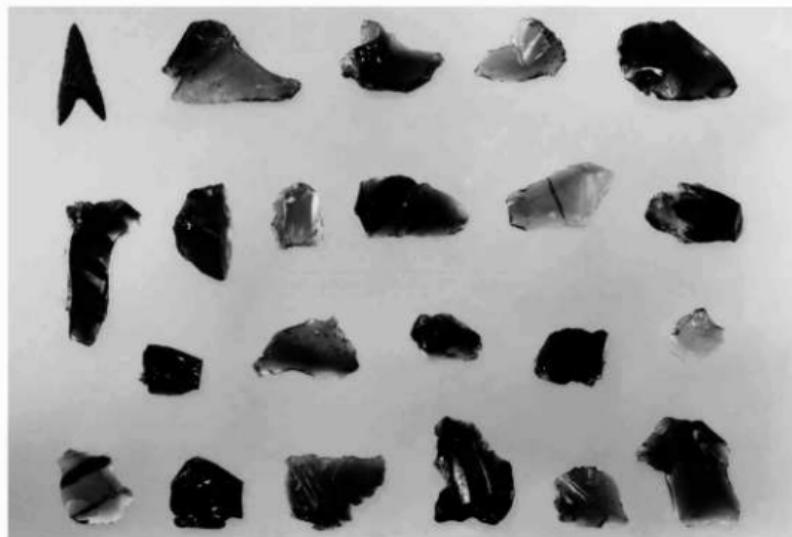
図版 22



遺構外出土遺物（5）



遺構外出土遺物（6）



遺構外出土石器 (1)



遺構外出土石器 (2)

荒神山西遺跡

平成元年度国庫補助都市公園事業町民プール
敷地造成事業に伴う発掘調査報告書

発行日 平成4年3月3日

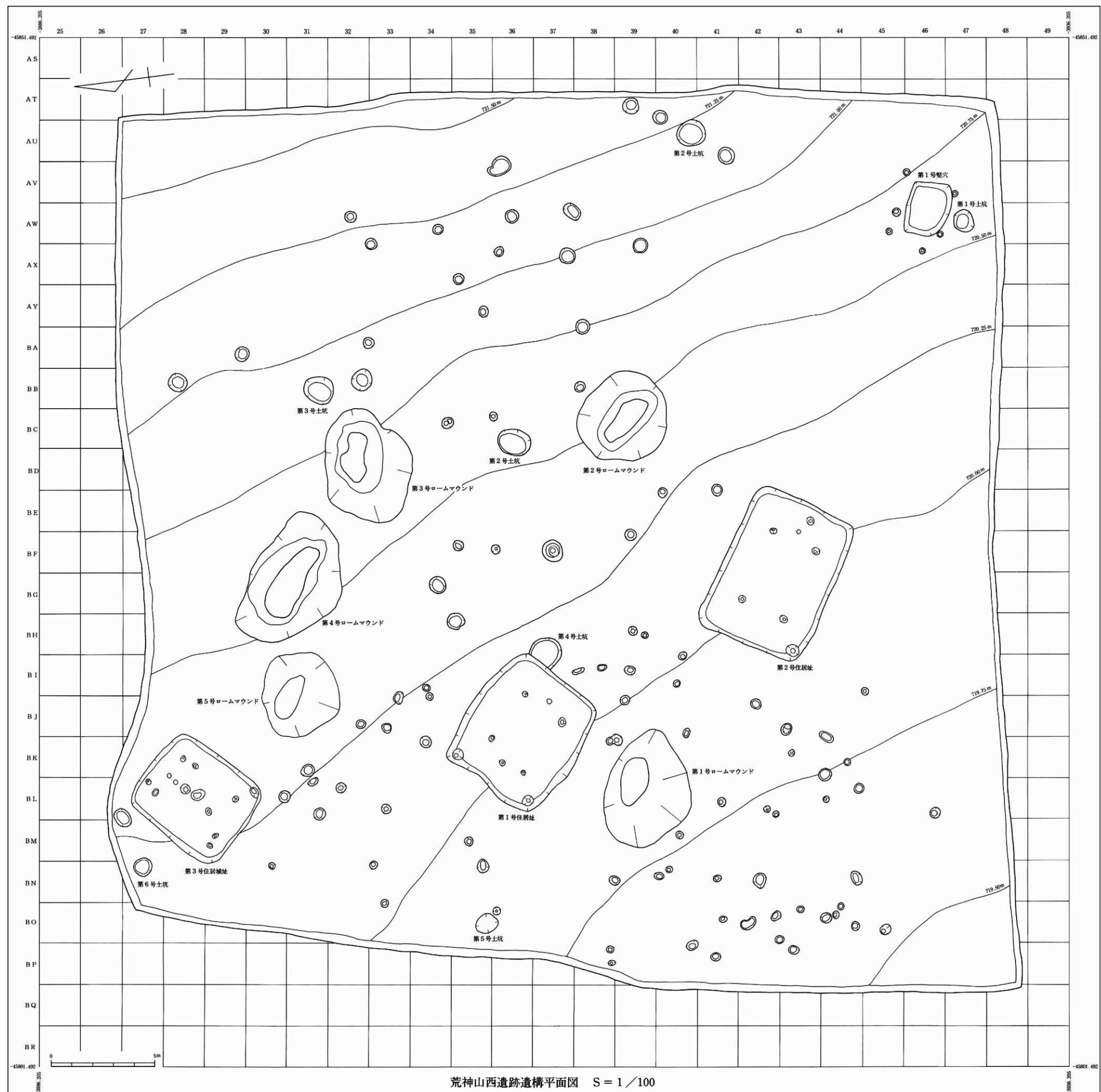
編集・発行 辰野町教育委員会

〒399-04

長野県上伊那郡辰野町中央1

☎0266(41)1111㈹

印刷所 株式会社小松総合印刷所



荒神山西遺跡遺構平面図 S = 1 / 100